

和歌山信愛女子短期大学
自己点検・評価報告書(FD活動実績)
FD・教学IR委員会

令和2年度 FD活動実績

○ 第1回 FD 研修会

日 時:2020 年4月 22 日(水) 10:00~11:00

場 所:1309、1312 教室

テーマ:遠隔授業の実施手順についての研修会

内容:以下の手順に基づき、Google Classroom を利用した遠隔授業の実施手順について研修を図った。

1) 遠隔授業について

遠隔授業については、『平成 13 年文部科学省告示第 51 号(大学設置基準第二十五条第二項の規定に基づく大学が履修させることができる授業等)(以下、「メディア授業告示」)』において以下の様に定義づけられています。

通信衛星、光ファイバ等を用いることにより、多様なメディアを高度に利用して、文字、音声、静止画、動画等の多様な情報を一体的に扱うもので、次に掲げるいずれかの要件を満たし、大学において、大学設置基準第二十五条第一項に規定する面接授業に相当する教育効果を有すると認めたものであること。

一 同時かつ双方向に行われるものであって、かつ、授業を行う教室等以外の教室、研究室又はこれらに準ずる場所(大学設置基準第三十一条第一項の規定により単位を授与する場合においては、企業の会議室等の職場又は住居に近い場所を含む。以下次号において「教室等以外の場所」という。)において履修させるもの

二 毎回の授業の実施に当たって、指導補助者が教室等以外の場所において学生等に対面することにより、又は当該授業を行う教員若しくは指導補助者が当該授業の終了後すみやかにインターネットその他の適切な方法を利用することにより、設問解答、添削指導、質疑応答等による十分な指導を併せ行うものであって、かつ、当該授業に関する学生等の意見の交換の機会が確保されているもの

さらに、文部科学省 Q&A では

Q:遠隔授業の実施方法として、教科書や教材による学修を一定時間自宅において行わせたいうえで、メールや掲示板等を用いて質疑応答等を行うことは許容されるか。

A:法令上、遠隔授業の一部において、教科書や教材による学修を自宅において行わせることが禁止されるものではございませんが、面接授業に相当する教育効果を有するものである必要があることから、授業外の予習・復習に相当するような単に教科書を読ませるといった形態は想定しておらず、授業担当教員による事前のガイダンス等において、当該授業の目的やねらい、教科書を読むに当たったの留意点や、必要な視点・観点などを示すなどにより、授業中に課すものに相当する学修である必要があります。また、大学通信教育設置基準第3条第1項においては、印刷教材その他これに準ずる教材を送付若しくは指定し、主としてこれにより学修させる授業(印刷教材等による授業)、大学設置基準第25条第1項の方法による授業(面接授業)、及び同条第2項の方法によるメディアを利用して行う授業(遠隔授業)が、別の方法として区別されていることを踏まえると、単に印刷教材等の送付により授業が完結することは想定しておらず、毎回の授業の実施に併せて質疑応答等による指導を行う必要があります。

上記告示および文部科学省の回答から、遠隔授業の成立には、

1. 同時双方向型:生配信
2. オンデマンド型:前もって録画・録音
3. 教科書・印刷教材の配布

のいずれかであって、

以下の2点を満たす必要がある。

- ① 設問解答、添削指導、質疑応答等による十分な指導
- ② 学生の意見の交換の機会

と考えられています。

本学の Classroom を用いた遠隔授業は、上記の3に該当します。

さらに、①②の基準を満たすために、

- ① 教科書・印刷教材の配布
- ② 授業担当教員によるガイダンス(当該授業の目的やねらい、教科書を読むに当たったの留意点や、必要な視点・観点などを示す)
- ③ 毎回の授業の実施に併せて質疑応答による指導
- ④ 学生の意見の交換の機会を保障の条件を満たすことが必須となります。

①では、必修科目については教科書を配布しますが、可能な限り Classroom 上でも資料を配信する必要があります。ただし、多くの学生が携帯でのみアクセスすることを考え、資料の容量や課題の内容を工夫する必要があります。

②については、全ての授業開始時には本時の単元の目的やねらい、課題を進める上での留意点や必

要な視点・観点などを示すことが重要です。

③の要件を満たすには、Classroom のコメント機能を通じて質疑応答による指導が可能になります。さらに、②と③の条件を満たすには、学内で行う対面式授業と同様、時間割に基づく進行計画が重要になってきます。

④については、コメントをクラス全員で共有することで、満たすことができます。

2) 本学の遠隔授業の概要

- ・ 使用するプラットフォームは Google Classroom
- ・ 多くの学生はスマートフォンなどの携帯電話で受講することを想定
- ・ 自宅で遠隔授業を受講できない学生には、登学しての受講で対応する。
- ・ 今回は教材や印刷資料を配付しておこなうタイプの遠隔授業を実施
- ・ 担当教員は課題への指導や学生の質問に対して、Classroom のコメント機能を用いて同時双方向的に対応する。
- ・ 遠隔授業用の時間割に基づいて実施(原則通常時間割の曜日に実施。例外あり。)
- ・ 時間割は同一学年同時間割り、29日(水)祝日は実施せず、土曜日に水曜日授業を実施する。
- ・ 原則1回100分の授業(実験・実習・実技も100分の授業を行う)
- ・ 通常授業と同様原則全教員が当該時間に対応するが、非常勤の教員で直接対応が困難な場合、事務室教務がサポートする。
- ・ 大まかな流れ:①出席確認→②授業説明→③課題の提示と説明→④課題遂行→⑤課題提出と確認→⑥課題の解説(解答など)→③～⑥→まとめ
- ・ 対面式の授業と同様出席確認が必要
- ・ 学生同士は互いのコメントを共有することもできる。
- ・ 共同しての演習も行うことが可能(添付資料を学生が編集可とすることで可能)。

3) 教員が用意するもの

- ・ ログイン用メールアドレスとパスワード
- ・ コンピュータなどの通信機器とネット回線
- ・ 課題作成の上で用いる資料(PDF や HP へのリンク、Google フォームを使った演習問題など)
- ・ 授業の説明
- ・ 課題:30分程度で達成可能な課題二つ程度が望ましい。
- ・ 課題の解答や解説
- ・ まとめの内容

4) 課題や添付資料作成における留意点

- ・ 事前に、学生に配布される教科書一覧を確認しておく。
- ・ 選択科目では教科書が学生の手元がないケースも想定しておく。
- ・ 添付できるのは PDF または HP 等へのリンク(動画等への対応は今後の課題)
- ・ 課題に演習問題を使用するような場合や、授業内でアンケートを実施するような場合は Google フォームで作成した問題も添付可能。
- ・ 周辺に印刷環境が無い学生を想定し、少なくとも初回は印刷しないで対応可能な資料に限定する。

- ・多くの学生がスマートフォンの画面で資料を閲覧すること想定する(添付資料の容量、文字や画像の大きさ、携帯端末では複数アプリを用いた同時作業が困難等の点に配慮する)

実施手順

授業時間	学生	教員
開始前	1) 使用器具:スマートフォンまたはタブレット、PC 2) アプリのダウンロード (ア) Google Classroom (イ) Google ドライブ (ウ) Google ドキュメント (エ) Google スプレッドシート 3) Classroom にログイン 要)ログイン用メールアドレス・パスワード 4) HR クラスおよび、月曜から金曜日までの5つのクラスに参加 要)クラスコード 5) 時間割を見て受ける授業を確認する。 6) 印刷が指示された資料がある場合は、事前に印刷しておく(可能な場合)。 7) スマホのみやプリンターが無い場合などはコンビニやスーパーで印刷する。	1) 使用器具:PC 2) 使用するソフトとアプリ: Internet Explorer, Google Chrome, Safari などのブラウザ。Google Suite for Education のアプリ GoogleClassroom 3) 資料・課題の作成 4) 遠隔授業用の時間割を見て、担当する授業時間帯を確認する。 5) Classroom にログイン 要)ログイン用メールアドレス・パスワード 6) 招待されたクラスに副担として参加 7) 資料を添付(資料はPDF または HP へのリンク、Google フォームで作成した演習問題など) 8) 事前に印刷しておくことが望ましい資料は課題の説明欄を用いてその旨を指示しておく。
授業当日 時間前	1) Classroom にログイン ログイン用メールアドレス・パスワード 2) 当日のクラスを選択 3) 授業より受ける授業を選択 4) 添付ファイルが開くか確認 5) 開かない場合はクラスのコメントを用いて担当教員に聞く	1) Classroom にログイン ログイン用メールアドレス・パスワード 2) 当日のクラスを選択 3) 授業→課題を表示→手順→クラスのコメントを追加、を開く
授業開始	1) クラスのコメントを見る。教員の指示に従い、出席確認を行う。 2) 教員のコメントを読んで本時の目的と	1) 出席確認を行う。 (ア) フォームを用いて出席確認。 (イ) 授業終了後出席状況を確認し、出席簿に記録する。

	<p>流れを理解する。</p> <p>3) 課題についての教員の指示コメントを読み、内容を理解する。 (ア) 課題作成の上で必要なことは紙にメモしておく。</p> <p>4) 教科書がある場合は指定の箇所を、資料が添付されている場合は、添付資料をクリックして読み、課題レポートをノートやメモにまとめる。</p> <p>5) Classroom で新しいドキュメントを作成し、レポートを入力する。または手書きレポートを写真撮影し添付書類として送信。Google フォームによる演習問題が提示されている場合は、時間内に解答して提出する。</p> <p>6) 分からない場合はコメント欄を用いて質問する。</p> <p>7) 教員のコメントを読んで、提出した課題を見直す。</p> <p>8) 次の課題を読む</p> <p>9) 以下同じことを繰り返す。</p> <p>10) まとめ</p>	<p>2) 最初に、課題のコメント機能を用いて本時の目的、ねらいの説明、授業の流れを説明する。</p> <p>3) 課題の提示と説明 (ア) 資料を予め添付しておく。 (イ) コメント欄を用いて課題を提示する。 (ウ) 課題について、達成するための方法を説明する。 (エ) 制限時間(30分程度)を延べ、課題レポート作成を促す。</p> <p>4) Classroom の『課題を表示』をクリックし、コメントや課題の提出状況を確認する。</p> <p>5) コメント欄を用いて質問に答える。</p> <p>6) 時間が来たら、課題の解答や解説を示す。</p> <p>7) 次の課題を提示する。</p> <p>8) 以下同じことを繰り返す。</p> <p>9) まとめ</p>
	<p>次の授業の準備</p>	<p>出席状況を確認し、出席簿に記載する。欠席者は事務所の欠席簿に記入する。</p>

○ 遠隔授業に関するアンケート調査の実施

遠隔授業を実施するに先立ち、学生の自宅での情報通信環境に関するアンケート調査を実施した。

令和2年4月 20 日

学生の皆さんへ

和歌山信愛女子短期大学
学長 森田 登志子

インターネットを用いた遠隔授業の実施について

本学では、新型コロナウイルス感染症の流行を受け、感染防止の観点から令和 2 年度前期授業開始を 4 月 27 日(月)に延期し、5 月 6 日(水)までの間、大学で行う対面式授業を取り止め、全てインターネットを利用した遠隔授業を実施することとしました。

本学の遠隔授業のソフトウェアは Google Classroom になります。同封のマニュアルに従って、受講への準備を行ってください。パソコンに限らずスマートフォンやタブレットでも受講できますので、ご安心ください。4 月 24 日(金)10:00 から 11:00 までの間、Google Classroom 内の HR クラス上で、オンラインによる遠隔授業ガイダンスを行います。是非ご参加下さい。なお、ご家庭に受講できる環境が無い場合は、学内で受講いただく事になりますので、その際は本学までご連絡ください。

授業は、同封の遠隔授業用時間割に沿って行います。朝 9:00 から夕方 17:00 まで(昼休憩 60 分を含む)、原則1科目100分の授業です。授業内では出席確認も行いますので、時間通り受講するようにして下さい。全ての授業は受講登録されているものとして行います。5 月 7 日(木)より登学が可能になりましたら、学内でのオリエンテーションにて正式な受講登録を行う予定です。ただし、感染症拡大の状況により、遠隔授業及び登学の日程をさらに延期する可能性もあることをご理解ください。本学ホームページで随時情報を発信しますので、ホームページの確認をお願いします。

また、遠隔授業実施に先立ち、ご自宅の情報通信環境に関する緊急アンケートを実施します。次の URL(<https://forms.gle/9zwCJXP8Df8P6b8eA>)を入力、または携帯で下記 QR コードを読み取り、開いた Google ログイン用画面に同封用紙に記載のログイン用メールアドレスとパスワードを入力していただくと、アンケート用紙が開きます。必要事項にご回答頂き、最後に送信をタップして頂くと完了です。アンケートの締め切りは 4 月 24 日(金)とします。アンケート結果は遠隔授業を実施する際の環境整備にのみ利用しますので、ご協力をお願いします。

遠隔授業では戸惑うことも多いかと思いますが、全ては皆さんの命を守る処置としてご理解ください。なお、不明な点がありましたら、本学事務室教務までお問合せください。

アンケート用 QR コード



【問い合わせ先】

本学事務室 教務係 中西

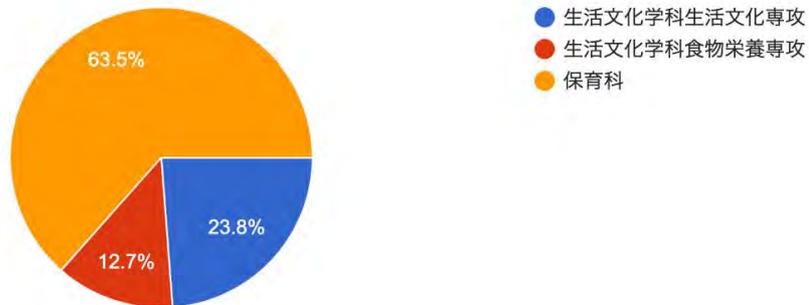
電話:073-479-3330

メール:info@waka-u.ac.jp・admission@waka-u.ac.jp

調査結果(回答数 252 件)

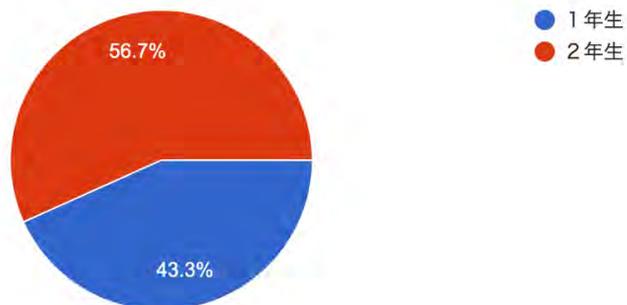
Q1 所属学科・専攻は？

252 件の回答



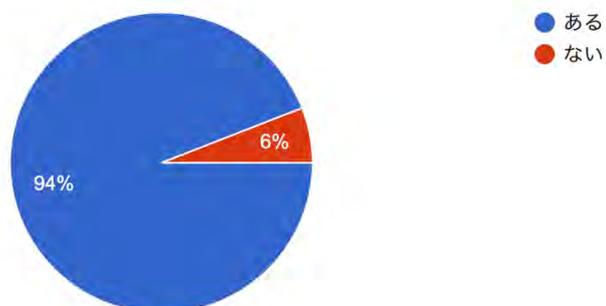
Q2 学年は？

252 件の回答



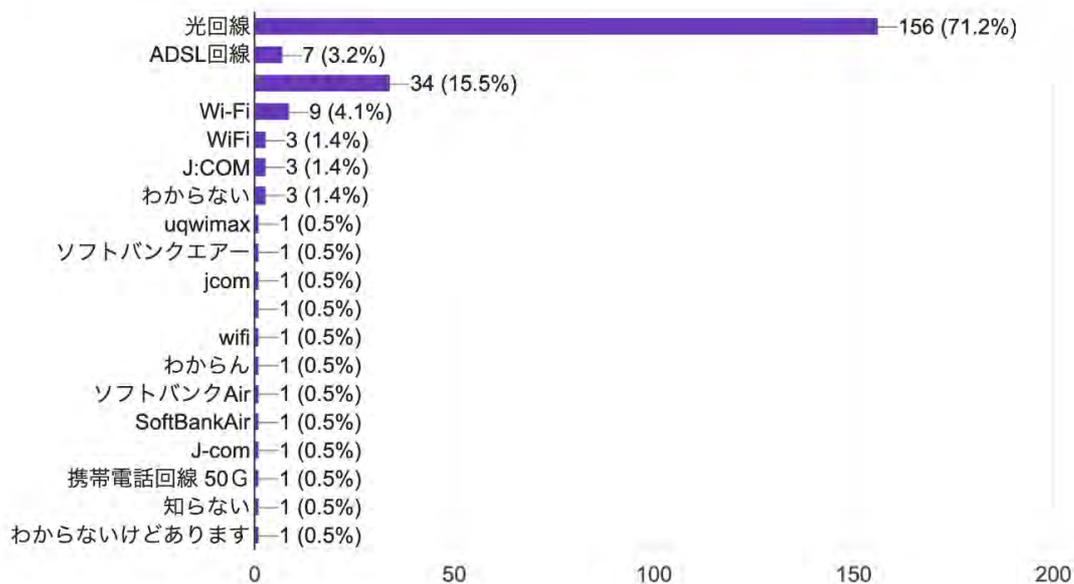
Q5 データ通信（インターネット）が使い放題の環境が既にありますか？

252 件の回答



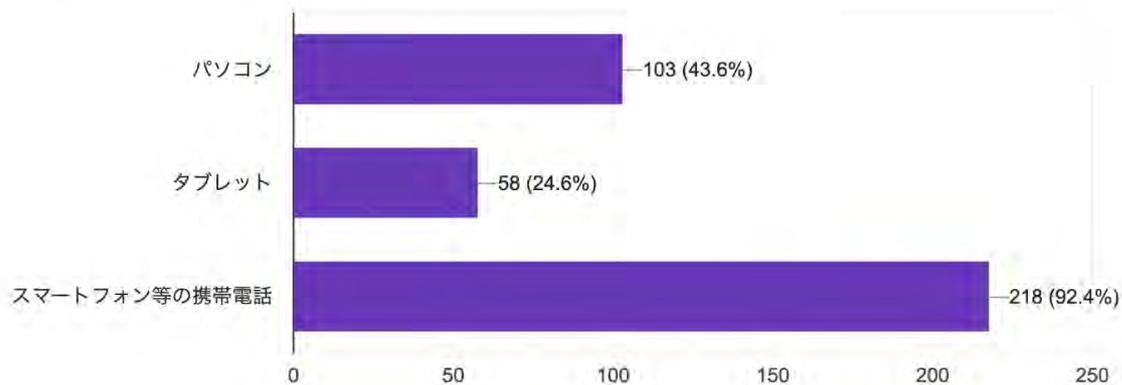
以下の種類のうち、どのネットワーク環境がありますか？（複数回答可）

219 件の回答



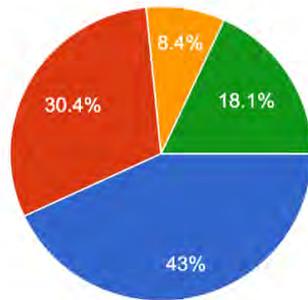
どの情報通信機器が利用できますか？（複数回答可）

236 件の回答



ダウンロードされた資料を印刷できる環境がありますか

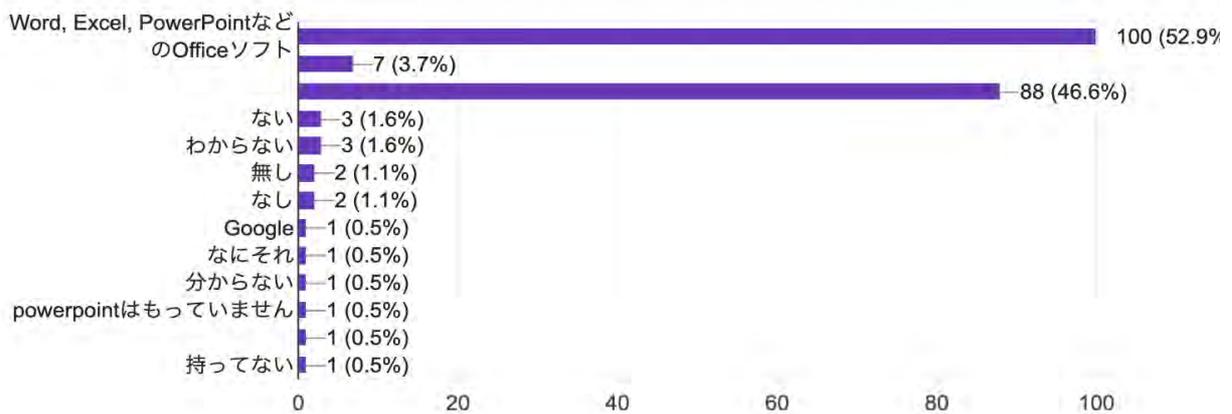
237 件の回答



- 自宅のプリンターで印刷できる
- 近所のコンビニやスーパーに行けば印刷できる
- 印刷できる環境がない
- 印刷できるかよくわからない

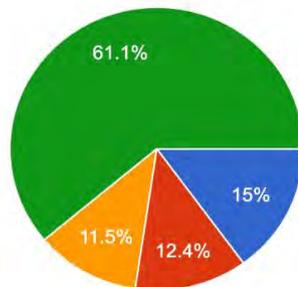
すでにお持ちのソフトについて当てはまるものを選択してください（複数回答可）

189 件の回答



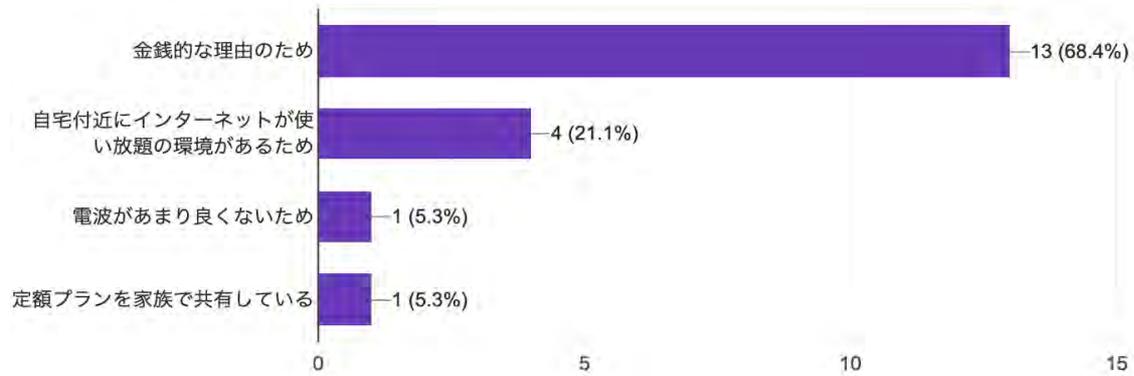
ソフトなどをインストールしてウイルス対策をされていますか

234 件の回答

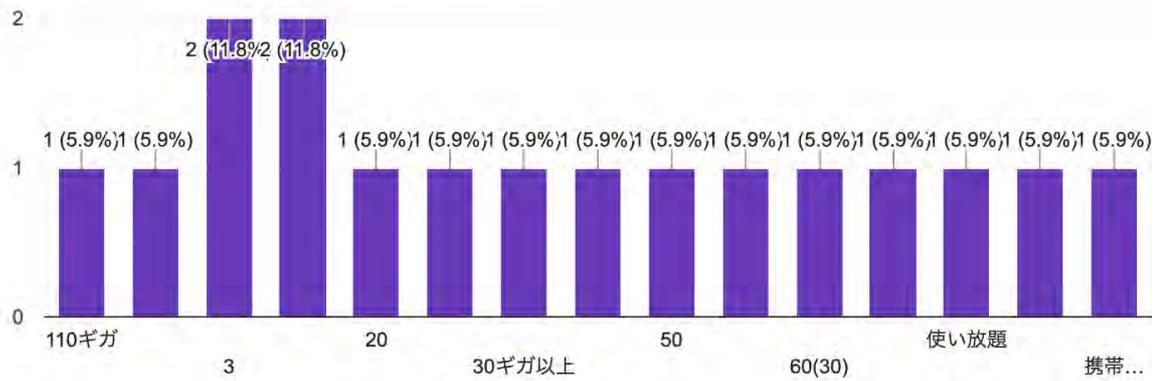


- 有料のサービスまたはソフトを購入して対策している
- 無料のソフトをインストールして対策している
- まったく対策していない
- よくわからない

データ通信（インターネット）が使い放題の環境が...備しない理由を教えてください。（複数回答可）
19件の回答



何ギガバイトまでの通信であれば、料金の追加や速...えください。（不明の場合は空欄で構いません）
17件の回答



○ 遠隔授業受講のためのガイドライン作成と配布

遠隔授業を実施するにあたり、以下のガイドラインを作成し、運用した。

遠隔授業受講のためのガイドライン(学生用)

令和2年4月 24 日制定

本学では、新型コロナウイルス感染症感染防止対策のため、4月27日(月)より当面の間(現時点では5月29日(金)まで)、大学で行う対面式授業の代替処置として、インターネットを利用した遠隔授業を行うこととなりました。

4月27日(月)から5月2日(土)まで第1回目の授業を実施したのち、5月11日(月)より再開して月末まで開講する予定です。6月以降は登学しての授業を予定していますが、状況により変更を伴う可能性があることをご了承下さい。

学生の皆さんは、原則在宅で受講していただくこととなりますので、以下のガイドラインを必ず確認のうえ、計画的に受講するようにしてください。

なお、5月7日(木)及び8日(金)を電話による受講相談日として計画しております。また、対面での相談をご希望される方についても対応させていただきます。その際は、事前に大学にご連絡くださいますよう、お願いいたします。

1. 本学が行う遠隔授業について

本学が行う遠隔授業では、学生の皆さんは配布した教科書・資料に基づき、Google Classroom を利用して課題に取り組むこととなります。既に配布の遠隔授業受講マニュアル(スマートフォン用)をよく読み、Classroom の利用方法をマスターしておいて下さい。パーソナルコンピュータを利用している場合は、コンピュータ用のマニュアルを本学ホームページ上に掲載しておりますので、そちらをご利用ください。

2. 受講に必要な環境について

遠隔授業の受講には下記の環境が必要です。自宅に受講する環境が無い場合は、学内にて受講することも可能ですので、その際は大学にご連絡ください。感染防止対策を行ったうえで、対応させていただきます。

【ログイン用メールアドレス・パスワード】

遠隔授業を受講するためには、本学より配布されたログイン用メールアドレス及びパスワードが必要です。配付されたメールアドレス・パスワードは大切に保管し、他人に見せないようにしてください。本人以外での使用が確認された場合は、大学によりアカウントの停止等の処置を執りますのでご注意ください。配付後、パスワードは自分で再設定可能です。再設定後に忘れるとログインできなくなりますので、注意してください。(ログインできない場合は大学まで連絡ください)

【情報端末】

受講には、スマートフォン等の携帯電話、またはタブレット端末、パーソナルコンピュータなど、インターネットに接続できる情報端末が必要です。

【通信環境】

受講する環境で適切に利用できるインターネット回線の準備をお願いします。スマホをWi-Fiに接続せずに利用する場合は、多くのデータ通信容量が必要になります。各通信事業者の追加データ無償措置についてご確認ください。

【使用アプリ・ソフト】

○ スマートフォンの場合

事前に以下のアプリのダウンロードが必要です。

- Google Classroom
- Google ドライブ
- Google ドキュメント
- Google スプレッドシート

○ パーソナルコンピュータの場合

Microsoft Edge(Windows10)、Safari (Mac OS)、Firefox、Google Chrome などのブラウザが必要です。

【プリンター】

スマートフォンの画面のみで授業を履修するのは困難な点があるかも知れません。プリンターがあると、授業資料を印刷でき、手元に置きながら授業履修が可能です。プリンターがない場合は、近くのコンビニエンスストアでも、ネットワークプリントや USB メモリに入れたデータを印刷することは可能です。詳細は各コンビニのサイトをご覧ください。

3. 受講登録について

1回目の遠隔授業(4月27日(月)から5月2日(土))については全授業を受講登録済みとして実施します。正式な受講登録期間は、5月2日(土)～8日(金)とします。遠隔授業でご登録頂いた Classroom 上のホームルームクラスにおいて、Google フォームを用いた受講登録を行いますので、期間中に登録するようにして下さい。

受講登録期間中、本学 HP よりオンラインでオリエンテーション動画を配信する予定です。必ず確認し受講登録をするようにしてください。

また、5月7日(木)及び8日(金)両日は、遠隔授業や受講登録に関して、電話による相談窓口を開設します。ご希望の方には対面での相談も対応いたします。

4. 時間割について

遠隔授業は時間割(遠隔授業用)通り実施します。朝9:00から夕方17:00まで(昼休憩12:30～13:30)、原則1科目100分の授業です。

2回目以降の授業については、6月以降に移動する科目等があります。新たな時間割については本学ホームページおよび Classroom のホームルームクラス上で配信しますので、ご確認ください。

5. 出欠管理について

授業内では以下の手順で出席確認を行います。

- ・ 出席確認は開始直後(10分以内)に行います。担当教員より Classroom のコメント機能を用いて指示がありますので、その指示に従って出席確認を行ってください。
- ・ 時間内に出席確認できなかった場合でも、コメントや授業時間内での課題提出によって出席が確認できた場合は遅刻とします。
- ・ 遅刻は3回で欠席となります。

重要！！

原則、半期5回の欠席で受講放棄とみなされ、評価を受けることができなくなります。保健体育講義および実験、実習(学外実習を除く)の科目は半期3回の欠席で放棄と見なされますのでご注意ください。どの科目が実験、実習かは、配布のシラバスでご確認ください。

欠席により資格取得や卒業が困難になる場合もありますので、出来るだけ出席するようにしてください。

ただし、遠隔授業開始の4月27日から5月15日(金)までの期間は、配慮期間とし、出欠については以下の対応を行います。

- ・ 通常の出欠確認に加え、Classroom のコメントで授業時間内での受講が確認できた場合や24時間以内に課題を提出した場合も、出席となります。
- ・ 回線トラブル等で受講出来なかった学生に対しては、届出(電話連絡)により『配慮を要する欠席』扱いとします。
- ・ 『配慮を要する欠席』と認められた場合は以下の対応を行います。
 - 授業は欠席としますが、1回目の授業(4月27日から5月2日まで)については、成績における減点は実施しません。2回目の授業(5月11日から15日)については、1週間以内に課題を提出した場合のみ減点せずに対応します。
 - 欠席回数が規定以上になった場合は1回に限り補充授業を行います。

6. 課題について

- ・ 遠隔授業では、課題の提出により評価等が行われます。課題の提出は受講時間内が原則です。
- ・ 課題の提出は、配布の受講マニュアルを参考に、担当教員の指示に従って行ってください。
- ・ 課題提出が24時間を超えて遅延した場合は、程度により減点されます(最長1週間)。
- ・ Classroom 上での課題提示は授業実施日から1週間とします。期間を過ぎると削除されますので、ご注意ください。

7. その他

遠隔授業については、教職員から指示されます。Classroom 上のホームルームクラスや本学ホームページに掲載されますので、随時閲覧するようにして下さい。

○ 第2回 FD 研修会

日時:12月14日(月)17:10~18:40

場所:視聴覚室(1307)

出席:28名(1名事務職員)

欠席:1名

内容:遠隔授業の分かち合い

配付資料

2020年12月11日

教員各位

第2回 FD 研修会について

2020年度第2回 FD 研修会を下記日程で行います。ご参集くださいますようお願いいたします。

日時:2020年12月14日(月) 17:10~

場所:視聴覚室(1307)

対象:専任教員(非常勤教員は自由参加)

内容:遠隔授業の分かち合い

FD・教学 IR 委員会

グループ A

メンバー: 伊藤、井上、森定、横地、大道

テーマ: 遠隔授業の分かち合い

I 工夫した方法、実践例、良かった点、問題点など

(森定)

- ・実践例: Youtube でケースや事例の動画を見せることや、テキストなプリントの内容に沿って、フォームで感想を求める。
- ・工夫点: フォームのアンケート機能を使って全体の意見をクラスで共有し、学びにつなげた。
- ・良かった点:
 - ① 学生の意見を知ることができた。全体の意見や良い意見をクラスで共有し、色々な人の考えを知る良い機会となった。
 - ② 資料がオンラインに残っているため、学生がわからないところを復習することや個別対応ができた。
- ・問題点: フォームなどで課題提出を行うと、手元に書いたものが残らないため、限定公開コメントで内容を送り返す、ノートで書いてから提出してもらい等、二度手間の部分があった。

(伊藤)

- ・実践例:
 - ① 事前に講義の動画を撮って、Youtube でアップロードし、学生に見てもらった後にコメントや感想をもらった。
 - 工夫点: 最初は 80 分の動画を一気に見せていたが、途中から動画を 3 分割にして短く、分かりやすいように変更した。
 - ② PPT など準備した資料を Meet で講義を行った。
 - 工夫点: スマホで受講する学生が多いため、文字が多すぎたり、文字が小さすぎたりしないことを意識して資料作成を行った。
- ・良かった点: 学生の生の声が拾えた。
- ・問題点: Meet で授業を行う場合は個別対応が難しかった。PC で Meet を行いながら、携帯で限定公開コメントをするなどかなり忙しかった。

(井上)

- ・実践例: 主にテキストに沿って授業を行ったが、pdf 資料を格納し、資料に沿った問題を解いてもらった。必要に応じて解説を行う形式で授業を進めた。
- ・工夫点: しっかりテキストや資料のページ数を伝えることや、対面授業時に必ず使った資料を配布し、復習を行った。
- ・問題点: 通信環境がそれぞれの学生が異なるため、対応が大変だった。

2020年度第2回FD研修会

(横地)

・実践例:主に PDF 資料を格納し、資料を読んでもらって課題を行ってもらっていた。場合によっては、対面時に事前にプリントを渡して、遠隔で解いてもらった・

・工夫点/問題点:個人の進み具合が異なることや、学生の状況がわからないため、こまめにコメントを使って進捗確認をするように意識した。

(大道)

・実践例:

①講義用の PPT に音声録音し、動画にして Youtube にアップロード。学生が講義の動画を見た後にフォームで理解度確認を行った。

②ドキュメントやスプレッドシートを学生に共有し、ケース検討や意見交換などのグループワークを行った。

・工夫点:

①授業終了アンケートを必ず実施し、学生の進捗確認を行った。

②理解度確認フォームの問題をなるべく選択形式にし、記述式を多くても 2 つなどスマホ使用の負担を減らすように意識した

・良かった点:グループワークを通して、意見交換などを行えた。

・問題点:準備に時間がかかったわりには、動画を見ずに課題を行う学生が多かったため、受講してもらう工夫がもっと必要だった。

II 改善方法

①通信環境の改善が必要

②他の教員がどのように授業を進めて、どのようなアプリや取り組みが可能か知らないため、全員でノウハウを共有できるようにしてほしい→取り組み集や事例集の作成

③レポートや課題提出が多いため、クラス内で終わらせられる課題や課題の出し方の工夫が出来る则学生の負担も軽減されるのでは？

④Meet は必ず録画して、学生が見直せるようにする。

III その他(今後の活用など)

①対面授業に出来ない学生のフォローや障害のある学生のサポートで活用できそう。

②親子が療育している姿など、DVD など学習教材にない Youtube 動画を見て学習してもらうなど、学習のサポートツールとして活用できそう。

③フォームのアンケート機能を使って、学生の声や意見を共有することに使える。

④オンラインの個別対応や相談に活用できる(例:ゼミのオフィスアワーや個別面談)

グループ B

メンバー：小笠原、田原、二平、野志、渡辺、五木田（敬称略）

テーマ：遠隔授業の分かち合い

I 工夫した方法、実践例、良かった点、問題点など

(特徴的であったと感じた意見を主に抽出して示すこととする)

《工夫した方法・実践例》

- ・meet、zoomなどの使用が環境等の問題で難しいが可能な限り授業にライブ感を作り出すためにチャット(限定公開)でのリアルタイムなやりとりを重視した。
- ・演習では、師範(実技)を動画で配信/提示し繰り返し確認できるように利用した。
- ・デバイス(PC等)を複数台使用し、フレキシブルな対応が可能なように考慮した。
- ・突発的な遠隔授業対応でありデバイスおよびアプリなどの使用方法に細かな理解が及ばない中で、デジタル(meetでの動画配信など)とアナログ(紙媒体での資料使用など:フリップなど)を組み合わせて自分ができる範囲で対応した。
- ・遠隔回と対面回の交互での授業進行であったため、フィードバック強化の目的で遠隔回の振り返りを対面回で行うことを意識した。

《良かった点》

- ・配信のための動画収録により自分の授業を客観的に見直す機会となった。
- ・遠隔授業では、普段の対面授業よりも発言内容を文字化する必要があることから些細な言動および言葉遣いならびに表現に気を配る必要があり、それに関して授業の質が向上した。
- ・遠隔授業用のフォーマットに授業中の発言や出席時間などが残るため再確認が容易であり、また他の授業内容を確認するも可能なため自己研鑽にも活用できた。
- ・課題の集計や提出タイミングの設定がしやすい。
- ・遠隔授業対応に教員間での協力が必要であり、チームワークが生まれた。

《問題点》

- ・指導者側および参加者側も電子機器を長時間注視する機会が増えるため疲労感の蓄積や集中力の欠如が生じた。
- ・対面授業とは異なり遠隔授業では、ある程度フリースタイルでの受講が可能となっているため緊張感に欠けると判断できる場面があった(チャット上での絵文字の使用など)。
- ・課題提出および出席確認において、代理を立てるケースが数件確認できた(他人の課題をコピーして提出するなど含む)。
- ・対面授業と遠隔授業が隔週で繰り返されるため学生に生活リズムの乱れが目立った。
- ・(真偽は定かではないが)受講生側に通信障害が多発するケースがあった。
- ・遠隔授業に用いるデバイスおよびアプリの使用方法が十分にわからず思うような授業が展開できないケースがあった。
- ・演習など、感性を表現する講義では、その指導に限界があった(芸術系の指導)。
- ・教員1名では、授業進行とコメント対応の両立が非常に困難であった。

2020年12月14日

2020年度第2回FD研修会

II 改善方法

- ・デバイスおよびアプリの使用方法について講習のようなものを充実させる。
- ・現状では遠隔授業用の機器等は指導者個人に依存しているところがあるため設備の拡充が求められる。
- ・課題の量が増えたため、数の調整や質の変化(一問一答など簡素な形式を増やすなど)で対応した。
- ・出欠確認や通信障害時の取り決めなどガイドラインの拡充を行う。
- ・こういうコメントが来たらこのように返すといったテンプレートを準備した。
- ・規則性のある受講者番号を明確に割り振ることで管理がしやすくなるのではと感じた。

III その他(今後の活用など)

- ・遠隔授業は課題のやりとり面では対面でのそれよりも応用が利く事が実感できた。
- ・遠隔授業は参加しただけで「やった感」が得られる面もあり内容が頭に残りにくい危険性を感じたため、従来のやり方であるノートへの記録なども併用したほうが学習効率は高いのではないかという意見があった。
- ・コロナ禍における蜜を避けるため対面授業で教室を分割して行ったものもあるが、手が回らない場面も散見されたため、遠隔授業用ツールの活用は視野に入れておく必要があるという意見があった。
- ・出席記録が参加時間を含めて明確に残るのは利用価値があるかもしれない。

グループ C

メンバー: 西原、桑原、東口、中西豊、中澤、倉谷

テーマ: 遠隔授業の分かち合い	
<p>I 工夫した方法、実践例、良かった点、問題点など</p> <ul style="list-style-type: none"> ・提示した内容 学生 意図がわかる、わかる、表情がわかる ・課題提出の、学生がわかる ・演習(ワークシート)等、わかる ・答えがわかる、授業 見解がわかる、わかる、遠隔では難しい ・顔が見えたり、学生のスピード感からわかる ・Zoom(最後) 授業の内容 理解できると答える ・意見がわかる、わかる見方もある → ネットワークがわかる ・ワークシート(20分) Youtube 見ながら Zoom で解答 <ul style="list-style-type: none"> ↳ 最初のみ 答えがわかる、わかる、答える学生もわかる ・資料を渡すのに 通常の3倍かかる ・ドキュメントワークシートで 学生同士意見交換 <ul style="list-style-type: none"> (表画) 話し言葉 絵文字 写真 指導必要な場面も ・⑤ 授業を行う難い、美観がある ④ 技術的な ⑥ <ul style="list-style-type: none"> ↳ 隣の学生の作品 見られる 安心感 苦無感 得られる <p>* 数回の対面授業で、新しい機能と一から学ぶのが大変。 * 学生の意見をネットに書かせることで、記録に残すことができて良かった。 ・非常勤の先生</p>	<p>⑦</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ネット機能 ・ネットの映像がくに見れる ・ネット好評 ・学校に来ていない学生も ・ネットが音声が可 ↳ 学生同士同じ意見 普段話さなかった学生も発言した
<p>II 改善方法</p> <p>10分1回 理解して頂くのに 時間がかかる 学生 課題は、印刷して非常勤の先生に渡す ネットワークの電話への対応</p> <ul style="list-style-type: none"> ・100分画面を1人1人見ると、休むことになる ・ネット通信の何度が休む、最後に送る ・Meet → 声を出して答えてもらうことができる... 学生がわからない意見がわかる。 ・普段 応答の遅い先生が話せることも 	
<p>III その他(今後の活用など)</p> <p>meets → ネット機能、可に結果が出る。</p>	

2020年度第2回FD研修会

グループ D

メンバー：浅田(教務)、今西、石川、山本、堀江、榎本(事務教務)

テーマ：遠隔授業の分かち合い
I 工夫した方法、実践例、良かった点、問題点など <ul style="list-style-type: none">・学生の様子が見えない・学生から、「自分自身に集中できる」とのコメントあり・フォーム活用のメリットが多い(結果がすぐ分かる、グラフなどの視覚化)・Meet は口頭で説明ができ、文字だけのやり取りよりも伝えやすい・Meet は「聞こえない」「見えない」など、学生個々のトラブルが多いが、すぐに気づけない・出席率が良い。・遠隔だと課題提出率が高い・データ揭示が便利、大量資料も可能・事前準備が大変、しかし準備ができれば当日授業自体は負担が減る・資料をアップしておけるので、授業終了後も確認できる・「授業内容や資料を後で確認できる」ことが、集中力欠如につながる面もある・学生の提出物にすぐにコメントしたり、フィードバックがしやすい・コミュニケーションなどに問題があり登学が困難な学生が遠隔授業で参加できた
II 改善方法 <ul style="list-style-type: none">・動画の時間を30分以内するなど、学生の負担を考慮する・資料や課題、説明など、時間配分や制限を明確にして学生の集中力をキープする工夫をする・今後、遠隔授業が継続する可能性がある場合、通信状況の安定や学生使用ツールについて、大学として対策が必要。入学時のアナウンスなどで、家庭の協力や準備も必要である。
III その他(今後の活用など) <ul style="list-style-type: none">・遠隔授業のメリットを生かし、今後も対面授業などとの組み合わせで資料提示に使うなど、効果的に活用していきたい。

2020年度第2回FD研修会

グループ E

メンバー：西出、中西淳、森岡、仲谷、渡邊

<p>テーマ：遠隔授業の分かち合い</p> <p>I 工夫した方法、実践例、良かった点、問題点など</p> <ul style="list-style-type: none"> ・対面授業のみ、遠隔授業のみ、交互の授業はなかった。暗記することが多い科目で、資料をPDFでアップして、フォームで確認テストを行った。 ・対面授業と遠隔授業の両方であった。YouTubeに15分程度の動画を4つ挙げて、限定公開コメントで学生の状態を確認しながら、フォームで確認テストを実施した。 ・対面授業と遠隔授業の両方であった。後期では、遠隔授業でMeetを用いた。 ・対面授業と遠隔授業の両方で、Meetを用い、資料は、対面授業の際に配布し、PDFでもアップした。 ・対面授業と遠隔授業の両方であった。資料をPDFでアップして、公開コメントで授業全体の進行を行い、限定公開コメントで、学生の進捗状況を確認し、フォームで確認テストを実施した。 ・PDFの使用は避けて、PowerPointで動画を作成して詳しく説明を行った。 ・PDFは、学生の様子を確認しながら、こまめにアップした。 ・フォームで、正解を示すことができるので、学生へのフィードバックが速やかに行われた。 ・公開コメントでの質問では、他の学生の目が気になるという学生がいた。 ・確認テストでは、時間を要する学生がいて、全員がフォームを提出するまで待てなかった。 ・普段あまり発言しない学生が、限定公開コメントにはしっかりと書き込むことができているということがあった。 ・最後まで、動画等を見ずに限定公開コメントにキーワードを入力する学生がいた。 ・出席フォームのみを送信して、途中応答がない学生がいた。 ・学生の様子がわからず、細やかな対応が難しかった。
<p>II 改善方法</p> <ul style="list-style-type: none"> ・動画を確認してからでないと言えないキーワードに変更をした。 ・限定公開コメントにキーワードを入力させて、授業に参加しているのかをこまめに確認した。
<p>III その他(今後の活用など)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・Wi-Fi環境設備の充実が必要である。 ・別室での授業、実験・実習での欠席対応等の可能性を検討する。

令和 2 年度
FD 実践報告書

和歌山信愛女子短期大学
自己点検・評価報告書
FD 実践報告書

保育科

図画工作の授業における、遠隔授業の取り組みについて

井澤正憲・保育科

【科目名】

図画工作

【授業概要】

素描、水彩、彫塑、版画など、美術や図画工作の基本的な表現を学ぶとともに、作品の展示や鑑賞について実践を通して学習する。また、和歌山の美術についても触れる。

【科目の到達目標】

知識・理解 造形的な表現の方法や手段、道具の扱いについて理解する。

技能・表現 多様な表現力を身に付け、表現する技術と能力を身に付ける。

知識・理解 創作や制作のプロセスの中で、素材感・質感の発見と表現方法を身に付ける。

態度・志向 感性に基づく表現を理解し、生涯学び続ける態度を身に付けることができる。

【実践した内容】

図画工作の授業は演習が中心であるため、事前に遠隔授業用の資料を学生に配布した。資料内容は「造形基礎（平面・立体）」「材料と道具」「素材と表現」「素材と技法」「装飾・文様」「現代美術史」「環境・展示」「紙の造形アイデア集」などである。これらは、図画工作での表現をより理解出来るようにと、対面授業用いるために作った教材にを遠隔授業用にまとめた。

本来の実習授業では、より多くの素材経験を積んでもらうために素材と表現について学ぶが、家庭で手に入る廃材利用を遠隔で取り入れる事にした。

実践例「空箱工作」

配布資料「造形基礎（立体）紙でつくる」

市販されている紙の種類、紙特徴などを事前に調べておかせ。

紙の扱い方から様々な造形例までのページを事前に予習させておく。

事前準備物

空き箱（お菓子の紙パッケージ）、包装紙などのプリントされたもの
工作に必要な道具（定規、カッター、ハサミ、両面テープ又は紙用接着剤など）

① 曲線の造形「花の飾り」

作品完成例とその作品制作に用いた図面を画像で紹介。

画用紙に渦巻模様を描くように指示。

ハサミやカッターナイフを用いカットしたものを各自の感性で造形させる。
葉は紙を二折りに折り、花の造形とのバランスを考えさせカットさせる。
葉脈はハサミの背を使い刻み付ける。
花と葉を接着させた後、作品を撮影して提出。

② 直線の造形「机」

花の造形とは異なり、1枚の紙を折ったりハサミをいれたり、曲げたり差し込んだりする作業を通して立体物を制作する。

花の造形は、自由に紙を切り刻んで制作したが、机の制作は図面を配布して行った。

制作は図面の指示通り進めていくことになるため、正確に使用する紙に書き写しカットする。

接合部や紙の折る方向を確認しながら組み上げ、完成後画像を撮影。

【成果と評価】

遠隔授業では、対面とは違い回りの作業スピードに左右されず自分のペースで出来たという意見もあったが、一人で作業していると間違ったことをしていないか不安になるという意見もあった。

テキストだけの説明では理解しにくいので動画も入れてほしい。

実技は少人数で対面で行ってほしい等の意見もあった。

また学生個々のインターネット環境の違いもあり、画面のサイズによりテキストが読みにくい、ネットが繋がりにくく画像を送れない等の問題もあった。

【今後の課題と改善計画】

図画工作などの作品を制作する授業では、テキストのみでの進行には限界があると感じた。

テキストをもっと分かりやすく遠隔授業用に作り変える課題。

個々の質問に応じて行う応用例や作業例は、後日対面で説明するにしても課題が残った。

改善としては、スマートフォン用に見やすいテキスト作成、豊富な作品例の画像の用意を行いたい。

保健体育講義の遠隔授業の取り組み

保育科 石川裕子

【科目名】

保健体育講義

【授業概要】

身体活動の必要性や健康の維持増進について理解し、生涯を通じて、健康的で豊かな社会生活を実践できる素養を身に付けることを目標としている。

【科目の到達目標】

- ◎知識・理解 身体の仕組み（形態）と働き（運動機能）の関係を理解することができる。
- 態度・志向 健康のために役立つ知識を論理的に考えることができる。
- △態度・志向 健康を意識した規則正しい生活を送ることができる。
- △態度・志向 ルールを守り、自分の役割を果たすことができる。

【実践した内容】

1	健康と体力	健康と体力の関係を学ぶ	遠隔
2	身体の仕組みと健康	身体の機能と構造について学ぶ	遠隔
3	脳とリズム	リズム運動がもたらす効果について学ぶ	遠隔
4	スポーツと栄養①	運動と食事の関係について学ぶ	遠隔
5	スポーツと栄養②	減量・ボディコントロールについて学ぶ	対面
6	応急手当①	AEDの使い方について学ぶ	遠隔
7	応急手当②	心肺蘇生法（CPR）について学ぶ	対面

毎時間、パワーポイントやPDFで資料や課題を提示し、Google フォームを使用した簡単な小テストの繰り返しを、100分間の中で3回程行った。

また、授業終了時はアンケートを行い、学生が遠隔授業に対して、どのような問題を抱えているのかなどを確認し、次回の授業に改善させた。

【成果と評価】

身体に関する内容の為、実際に身体に触れたり、実技を通して身体で確認したりしながら授業を進める予定であったが、対面での授業が出来なかったため、筋肉や骨などの構造についてやリズムに関する内容は、伝わりにくかったように感じた。

いかに伝わりやすくするかを配布資料で工夫したが、学生の手元に残る情報量（資料やコメント）は多くても、頭に残る情報量は少なかったのではないかと、2回の対面授業を通して感じた。

ただ、今の学生の様子を見ると、対面では自分の意見を積極的に発言出来る学生はほとんど居ないが、顔が見えない状態で、文字として発信する方が、沢山の積極的な意見を出すことが出来るように感じた。

また、授業時間内は、コメントのやり取りも行っていたが、様子が見えない為、「態度・志向」の積極的に学ぼうとする姿勢が身に付いているかの評価は、少し難しく感じた。

【今後の課題と改善計画】

講義内容であれ、簡単な実技を伴う内容が多いため、動画を用いたり、映像でのやり取りを出来る方法を取り入れた方が、より伝わりやすいのではないかと考える。

ただ単に、録画動画を流すだけではなく、オンラインでのやり取りを行うことで、表情を読み取ったうえで、やり取りができるので、学生の不安もこちらの不安も解消できるように感じる。

保健体育講義の授業における遠隔授業の取り組みについて

今西 香寿・保育科

【科目名】

保健体育講義

【授業概要】

体を動かすことは生涯を通じてより健康な生活を送るために欠かせないものである。体の健康だけではなく、健康を保つためには、心も健康でなければならない。自身の健康管理に関心を持たせ、計画的に運動を実践する習慣づけ、ストレスの対処の必要性を理解する。

【科目の到達目標】

◎	知識・理解	心と体の健康について基礎的な知識を習得する。
○	態度・志向	自分の健康について意欲的に考える姿勢が身についている。
△	態度・志向	自分の健康を保つための運動を計画的に実践できる方法を身につける。
△	態度・志向	リーダーシップを発揮できる。

【実践した内容】

私たちが健康に過ごすためには、日々の暮らし方が大きな影響を及ぼす。食事内容や質の良い睡眠、運動など様々な事が体に影響を及ぼす。健康に過ごすには、文部科学省（2013）は、丈夫でバランスのとれた体を培うために、「よく遊び、よく食べ、よく寝る」ことが大切であり、この中の一つでも不足したり、また過剰になったりすることは好ましくないと述べている。しかし、日々の暮らしが便利になったこともあり、生活の中で体を動かす機会が減ったために、身体活動量が減少をした。反対に、24時間営業のコンビニエンスストアやスーパーができ、お腹がすくと、いつでも手軽に食事をとることが可能になった。身体活動量が減少しているにも関わらず、栄養を取りすぎることが原因で、糖尿病や生活習慣病などになるリスクが高くなった。また、携帯電話やパソコンなどの情報機器の普及により、情報量が過多の状態となり、情報機器を手放せなくなっている。そのため、睡眠時間が削られたり、ブルーライトが原因で眠りが浅くなるなど、睡眠に影響を及ぼしていると考えられる。

このような背景から、厚生労働省は「健康づくりのための身体活動指針（アクティブガイド）」として、以下のことを示している。「1. 最初は+10（プラステン：今より10分余分に歩く）程度から始める」「2. 個々人の生活スタイルに応じた運動・生活活動の取り組み」「3. 行動変容理論に基づき、個人の運動に対する心理的準備状況に応じた取り組み」「4. 食事・栄養改善との組合せによる腹囲の減少の取り組み」などの配慮が不可欠であると述べている。

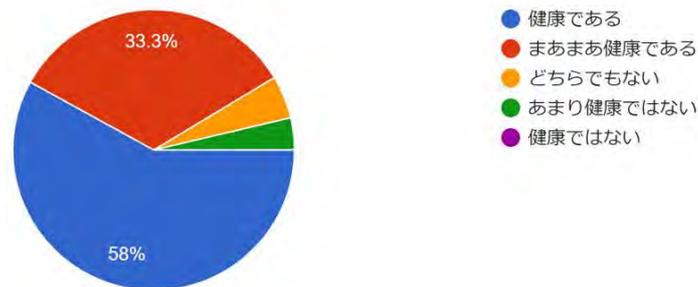
本学において、健康に関する授業は「保健体育講義」（通年・1単位）で行われている。学生自身の生活習慣の見直しや健康に対する意識を高めるためのねらいをもつ。本学は、保育者養成校であるため、保育者をめざす学生において、自分自身の健康管理をすることは、子どもの前で元気である姿を見せることにつながる。また、保育者になると、子どもの生活環境を整えることも保育者の重要な役割と考える。そのため、まず自分自身の生活環境を見直すことは社会人になる前にとっても重要なことであることを理解してほしいと願う。そこで、本授業において、学生自身のライフスタイルの見直しを行った。

授業の進め方として、グーグルフォームを用い、健康に関しての設問に対し、ラジオボタンで答えたり、自分自身の健康について答えることができるように記述式で回答が求めた。その結果を授業時間内や次の授業でグラフ化した

もの（表1）を全員で共有するなど、目で見て理解をすることができるよう心掛けた。また、コロナ禍の中での生活であるため、外出自粛要請が出されており、自宅で過ごす時間が増え、コロナ禍以前の生活より体を動かす機会が減ったと考えられる。そこで、家の中でもお手伝いをする、散歩をするなど、少しでも体を動かすことに対し、意識を持つことができるように、日頃の活動量を記入することができる記入用紙を作成した。（表2）

（問1）現在、健康ですか？と聞かれたら、どのように答えますか？

81件の回答



（表1）授業で活用したグラフ化の1部

月日	活動内容	活動時間	感想・明日の目標
5/14	歩く	30分	歩くだけでは面白くなかった。なので、母も体を動かした方がいいと思うので、誘って一緒に行こう。ソーシャルディスタンスを守って。
5/15	母と歩く	30分	普段、歩いていなかったなので、筋肉痛になっている。そんな体であったが、一人ではなく、一緒に歩いたので、話がはずみ、時間経過が早く感じた。一人ではなく、だれかと一緒にすると、続けられそう。明日は母が忙しいので、なわとびをしてみよう。
	（省略）		
5/21			
	1週間後の体の変化		最初、やり始めた時は筋肉痛になったが、毎日やっていくにつれ、だんだんと体が軽くなってきた。体重も少し減った。

（表2）活動用紙の記入例

【成果と評価】

授業評価の結果として、【I】授業の計画について【II】授業の内容について【III】教員の教え方について【IV】授業の成果についての4項目すべてにおいて、5段階の中で4.7以上、保育科平均、全体平均すべてにおいて高い評価となった。4項目の中でも、【II】授業の内容についての項目が4.81と最も高く、自分の健康について関心を持つことができたのではないだろうか。中でも【II】授業の内容についての項目において、「この授業は自分のためになる内容だった。」という質問に対し、4.86、「この授業は興味や関心が持てた。」「授業の目標が分かりやすく示されていた。」という質問に対しても4.78の高い評価であった。授業内容に興味を持つことができた結果もあって、【IV】授業の成果についての項目において、「私はこの授業に意欲的に取り組んだ。」「この授業を通して、新しい知識、技術、能力が身についた」という質問に対し、4.78の高い評価であった。対面授業では、全体に話をしていることであるが、遠

隔授業では個々のやりとりであるため、学生自身が自分に向き合うことができたのではないかと考える。また、【Ⅲ】教員の教え方についての項目において、「教員の言葉は、聞き取りやすかった。」「学生の質問に対して適切に答えていた。」という質問に対し、4.74の低い結果となった。教員側も初めての遠隔授業であり、グーグルフォームを用い、学生に対し、答えさせるというスタイルしかとっておらず、教員側の教授方法の課題が残る結果となった。

【今後の課題と改善計画】

授業評価の結果から、科目の到達目標には達しているのではないかと考える。遠隔授業を行ったことで、一人ひとりの学生の理解度を見ることができた。対面授業では、一斉に行っているため、学生の表情を見ながら、学生は理解をしているだろうと思い、授業を進めていた。例えば、健康を保つために食事・運動・睡眠の必要性について講義を行っていた際、よりおいしく食事をとることができ、ぐっすり睡眠をとるためにはどのようにすればいいかの設問に対し、対面授業では「運動をすること」という回答を学生たちに伝えていた。しかし、遠隔授業で一人ひとり回答を求めると、「よく噛んで食べ、携帯を見ずに寝る」や「間食を控え、寝る前に白湯を飲む」など、様々な回答であった。そこで、「運動をすることによって、お腹がすき、体を動かしたことで体が疲れているため睡眠が深くなる」と答えを配信したところ、「運動の必要性を知ることができた」や「勉強になった」などの退出時アンケートの結果が得られた。学生自身の経験や中学や高校の頃の保健体育の授業においても健康を保つためにどのようにするかなどは学んできている。しかし、結果として理解していないということが分かった。遠隔授業を通し、学生一人ひとりの回答を見ることができたからこそ、今後の授業においては、分かっているだろう、知っているだろうではなく、学生は知らないかもしれない、分かっているかもしれないということを意識しながら、授業を丁寧に進めていく必要があると考える。

【参考文献】

文部科学省「幼児期運動指針ガイドブック 毎日、楽しく体を動かすために」(2013), pp. 21

厚生労働省「健康づくりのための身体活動指針 (アクティブガイド)」

(<http://www.mhlw.go.jp/stf/houdou/2r9852000002xp1e-att/2r982000002xpr1.pdf>)

「幼児理解と教育相談支援」における 遠隔授業の取り組みについて

大道 えりつ・保育科

【科目名】

幼児理解と教育相談支援

【授業概要】

幼児を理解するために必要な知識や方法を理解し、事例や映像によるカンファレンスを通じて、幼児の実態から保育を構想し、実践する術について学ぶ。さらに、幼児教育現場において、幼児や保護者が様々な悩みや課題を抱えており、その課題への対応方法についても学び、適切な援助・支援の方途について体得する。

【科目の到達目標】

学修成果の領域	学生の到達目標
◎ 子ども理解	幼児を理解するために必要な知識や方法を理解する。
○ 保育の指導力	観察や記録から幼児の発達状況を読み取り、適切な援助方法について提案分析できる。
△ 教育的愛情	教育相談の理論や技法について理解する。
△ 論理的思考力・ 問題解決力	幼児のつまずきや保護者の悩みやその対応方法について考察することができる。

【実践した内容】

本科目は、「幼児理解についての考え方、基礎的態度、方法を理解すること」と「教育相談を進める際に必要な基礎的知識を身につけ、具体的な進め方を知ること」をねらいとしている。授業への学びを深めるためには、幼児理解や教育相談に関する知識習得以外に、グループでの事例検討や教育相談のロールプレーなどの実践的活動が必要な科目である。したがって、前期14回の授業のうちの9回を遠隔で行なった際は、各授業の前半は授業のテーマとなる内容を講義形式で行い、後半は学んだ知識を応用できる課題を取り入れた。

(1) 遠隔授業で使用したアプリと使用方法

遠隔授業で使用したアプリやソフトに関して、全ての回におけるテーマ学習講義をパワーポイントに音声吹き込んで動画作成を行い、講義動画を見た後、講義内容に関する問題をGoogleフォームで提示し、理解確認を行った。5回目の遠隔授業までは問題の解答や解説をClassroomの課題画面やPDFで示していたが、学生から「資料が多い」「わかりづらい」という意見があったため、6回目以降はGoogleフォームのテスト機能を用いて、回答送信後にスコアと解答・解説を確認できるように設定した。応用課題に関して、第4回「幼児理解の方法：観察、面接、記録などアセスメントの方法」では記録や成果物の分析、第11回「教育相談と支援の実際」では相談支援時に子どもの発達段階に応じた助言を考える課題をGoogleフォームで提示した後、モデル回答や学生回答から良かったものを

Classroom の課題画面やコメントで共有した。また、第 5 回「幼児理解と評価：評価を行う時の基本的考えや方法」と第 7 回「幼児のつまづきの理解とその対応」では、遠隔授業中に事例検討会を行った。テキストにある事例を読んでもらい、グループワークができるように 8 人 1 班にクラスをわけた。班のメンバーや事例検討会で話し合ってもらい、項目を記載した Google ドキュメントを格納し、ドキュメントを全学生が編集できるように設定変更を行ったあと、学生がドキュメントに自分の意見や考えを書き込めるようにすることで、他者との考えを共有し、意見交換ができるようにした。Google ドキュメントを全員で見られる設定で行うことが初めての学生が多かったため、授業前に使用マニュアルを掲載した上で、テスト用のドキュメントを格納し、操作できるかなどの確認を行ってもらった。

(2) 遠隔授業で行った工夫

小池 (2002) は、遠隔授業の難点として、(1) 学生と直接の交流ができないこと、(2) 全員の把握が難しいこと、(3) 指名対話や質問がしにくいこと、(4) 教材提示の方法に工夫が必要なことの 4 点を挙げている。本授業では、指名対話や質問を行わなかったため、(3) に対する工夫を行わなかったが、(1) (2) (4) の課題に対して以下の対応を行った。

学生と直接の交流ができない点に関して、本来でしたら双方向のやりとりが可能とする Google Meet を用いて講義を進行するのが理想でしたが、100 人近い受講生の顔を見ることが難しいことやテレビ会議での進行は学生の通信トラブルなどの個別対応が難しいため、Google Meet の使用を断念し、動画での講義形式を選択した。特に遠隔授業当初は、学生も Google Classroom の使用に慣れないことから操作に対する不安が多く、学生が安心して受講できるように限定公開コメントを 5 分に一度は確認し、課題提出していない学生にはこちらから「課題 2 まだ提出していないが、大丈夫ですか？」等、個別の声掛けを通して進捗確認をするなどの対応を行った。

全員の把握が難しい点に関して、授業終了後に必ず Google フォームで授業終了アンケートを実施し、授業の内容や進め方で不明な点がなかったか、操作が困難な部分がなかったか、対面授業の時に復習してほしい部分、授業のことやその他の感想・意見の把握を行った。アンケートからは、「PDF とか多すぎて見にくい」「コメント欄で重要なところをわかりやすくしてほしい」「資料をアップするタイミングをもう少し早めてほしい」など学生の状況や要望を把握し、次の授業に反映するようにした。また、どの課題を何時まで行ったらいいのかなど、学生が見通しを持てるように Google Classroom の課題画面に授業の目標、授業の流れ (何時から何を行うのか) や授業中に送信する課題を記載し、学生全員が共通認識を持てるようにした。(図 1 を参照)

教材提示の方法に関して、8 割の学生はスマートフォンで遠隔授業を受講しているため、使用者の負担を軽減するための工夫を心掛けた。スマートフォンで操作する手順を減らすため、講義で使用する動画を Google フォームに埋め込み、フォームを開いた状態で動画を見て理解度確認用の問題に取り組めるようにした。(図 2 を参照) 講義動画の長さも集中力が損ねないように 1 本 20 分以内に収め、動画内で使用したスライドは文字フォントを大きめ設定し、内容がイメージしやすいように画像を多めにいれ、音声による解説もいつも話している 7 割程度のスピードで行った。また、重要な部分は繰り返し強調し、講義の終わりにはまとめ部分で再度伝えるなどの工夫を行った。過去分の講義動画も課題画面に掲示し、いつでも見直せるようにオンデマンド形式にした。Google フォームで提示した理解度確認用の問題も主に選択形式で作成し、記述式の問題は多くても 2 問に限定し、打ち込む大変さを考慮した。

遠隔授業の課題に対して、個別対応が行えるように限定公開コメントでの頻繁なやり取り、クラス全体の把握ができるように授業終了アンケートの実施、また講義が分かりやすいように文字の大きさや解説のスピードを意識した教材提示などの工夫を通して、学生が遠隔授業を安心して取り組めるような学習環境を保てるように意識し、対応を行った。

【第11回の授業】

◎授業のテーマ：「教育相談と支援の実際：カウンセリングの流れと発達段階や課題に応じた教育相談方法」

◎目的：
 ①カウンセリングを用いた教育相談支援の流れを知る
 ②幼児教育の専門家として助言の伝え方を行えるようになる

◎テキスト該当部分
 『生徒指導提要』第5章 教育相談（103～105ページ）

◎授業の流れ：動画での講義を受講し、講義内容に関する質問や事例検討を行う
 ①13:30～13:40 出席確認
 ②13:40～14:15 講義1：面談の流れと進め方について学ぼう！
 ③14:15～15:00 講義2/事例：幼児教育の専門家として助言をしてみましょう！
 ④15:00～15:10 まとめと授業終了アンケート

◎授業で送信するもの
 <フォーム>
 ①出席確認シート
 ②幼児理解と教育相談支援 第11回 (1)
 ③幼児理解と教育相談支援 第11回 (2)
 ④授業終了アンケート

図1 見通しを持てるための工夫

幼児理解と教育相談支援 第11回 オンライン講義 (1)

1) 「カウンセリング」の定義にもっとも相応しいものを選択してください。*

①カウンセリング的に人と関わろうとする人が持つべき態度、考え、心構え

②対話や会話をおしてクライアント（相談者）が困っていることや悩んでいることを解決していく相談援助

③支援者が、言語的・非言語的なコミュニケーションを通して、相談者の行動を変容させること

図2 Google フォーム使用時の工夫

【成果と評価】

全学で取り組んでいる授業評価アンケートの結果から、「教師の教え方について」を分析すると、「7. 教員の言葉は、聞き取りやすかった」は、5段階評価において、4.39、「9. 教科書、板書、配布資料、視聴覚教材、実演などは、授業内容の理解に役立った」、4.34などの評価から、講義動画での話し方を意識したことやGoogle フォーム使用時の工夫が学生の遠隔での学びや理解につながったことが分かった。一方、同じ教え方についての項目では、「8. 学生の理解に合わせた授業が進められていた」4.27、「10. 授業に集中できる環境、雰囲気を整っていた」4.23と7と9の項目と比較すると低い評価であった。要因として、新しいアプリの操作がうまくいかないことや基本知識を応用する課題をイメージできずに取り組んでいたとみられる。特に、第5回「幼児理解と評価：評価を行う時の基本的考えや方法」で行った事例検討会の授業終了アンケートでは「ちゃんとドキュメント上自分のコメントがあるのかが不安です」「途中でエラーがでた」など操作での不安が授業に集中できない要因となっていたことがわかった。また、第11回「教育相談と支援の実際」では相談支援時に子どもの発達段階に応じた助言を考える課題の時の授業終了アンケートでは、「難しかった」や「相談を受けた時の返しが定型文になりがちで、同じかたちに違う単語をはめているだけという感じになってしまいました」などのコメントから、相談場面をイメージできずに課題に取り組んでいたことが伺えた。上記の内容からは、集中して遠隔授業を行うためにはアプリなどの操作確認やフォローをしっかりと行うことが重要であると同時に、実践形式の課題はイメージしやすいように相談支援の動画を見せることやGoogle Meetでの双方向のやり取りを行うなど、学生や理解しやすい工夫が必要であることがわかった。

【今後の課題と改善計画】

今年度の授業を振り返り、次年度に向けて改善したい点を次に挙げる。

1. 小池（2002）は、遠隔授業は空間の共有ができないため、教員が一方向的な情報伝達を行い、受講者の興味を高めることができず、受け身の受講になると述べた。したがって、「空間の共有」を行うには双方向のやり取りが可能なGoogle Meetの使用が必要であると感じた。取り入れるにあたって、「学びのコミュニティ感」を引き出すための工夫が重要であると考え、授業前にGoogle Meetで会議を立ち上げて教員や学生同士がやり取りを行えるようにすることや、授業後にオフィスアワーを設けるなど、一定時間を質疑応答に使用できるようにしていきたい。また、授業中にやり取りを増やす工夫として、学生に質問や意見を求める時間を設けるなど、意見交換や交流の機会を作ること

を検討したい。

2. 今回の遠隔授業の取り組みの中で、事例や相談支援の場面に応じて行う実践的課題で躓く学生が多く、対応する事例や場面が遠隔だとイメージしづらいことが要因となっていると考える。したがって、講義動画や参考資料以外にも、新聞記事、youtube 動画、教育映画、図や絵などの教材を使用し、実践や応用課題がイメージしやすい工夫を検討し、取り入れたいと考える。また、遠隔での事例検討会で学生の記述を確認すると、雑談に近い文章の記載があることや、絵文字を使用したケースも見られたため、事例検討会を実施する前にガイドラインの提示を行う必要があると感じた。

3. Google フォームを用いた授業終了アンケートは学生の状況を把握するのに有効であったため、継続的に使用していきたいと感じた。状況把握以外にも、アンケートを通して学習テーマに対して学生の考えや意見を拾い、次の授業で全体共有を行うなど、学びを深めるためのツールとしても取り入れていくことを検討する。

【参考文献】

小池浩子 (2002) 遠隔授業の抱える課題と効果的授業方法—教員のコミュニケーション能力の役割— 信州大学教育学部紀要, 105, p. 85-96.

飯吉 透. “世界一受けたくなる遠隔授業を目指して～学生を惹きつけ学びを深める工夫～” manaba. 2020/7/22.
<https://manaba.jp/reports/7635/> (2021/1/28 参照)

「乳児保育 I」の授業における 遠隔授業の取り組みについて

小笠原眞弓（保育科）

【科目名】

乳児保育 I

【授業概要】

乳児期は人間の基礎を培う大切な時期であることを理解し、保育に携わる保育者の知識、技術を高め、乳児保育の基本および重要性と役割を理解する。

※「乳児保育」とは、保育所や認定こども園において3歳未満児に対する保育を示す。

【科目の到達目標】

授業の目標は1)「乳児保育」の意義、目的、及び「保育所保育指針」にみる乳児保育の役割を理解する。2)保育所、乳児院等さまざまな施設の乳児の保育、その現状と課題を理解する。3)3歳未満児の発育、発達を踏まえ、保育者としての役割、職員・保護者との連携について理解する。

学習成果の領域		学生の到達目標
◎	知識・理解	乳児保育の意義と目的、役割を理解する。
○	知識・理解	乳幼保育の現状と課題を理解し、適切な対応ができる。
△	知識・理解	乳児の発育を踏まえ、愛情豊かな対応ができる。
△	技能・表現	保育者の役割、専門性を理解する。

【実践した内容】

今般のコロナ禍において、今年度の授業は対面授業と遠隔授業を隔週で実施することとなったが、幸いにも本教科は後期開講の科目で、授業開始が他学科とずれていた為、授業回数14回のうち対面授業が9回、遠隔授業が5回という割合で行うことができた。

遠隔授業を取り入れることで、まず検討したことは授業の内容である。シラバスに準じて行う努力をしながらも、遠隔授業の方が有効で、さらに学生が主体となって取り組める内容に見直し、併せて実施時期も考慮した。そして、遠隔授業の為の資料作りに時間をかけた。作成した資料と課題シートは事前の対面授業で提示、若干の説明を加えて学生に配付することを心掛け、学生達が次の遠隔授業の内容に見通しをもち、スムーズに受講できるように配慮した。その日の授業が始まると学生はテキスト等を参考に、出された課題を解決しながら手元のシートに記入、その間、質問がある場合は限定コメントでやり取りを重ね、課題を終えた者からシートの写真を送信させ学習状況を把握した。そして、その日の課題（シートを含む）はノートに整理させ、後日、ノート提出を行いチェックすることで各自の学習への取り組みや理解度を確認した。

この一連の過程の中で学生からの質問や課題についてのコメントには出来る限り即座に対応しようと努めたが、授業時間内に76名全員に応えるのは難しく、返信が授業終了後になってしまった。今後も遠隔授業を行う場合はこの点が課題となり改善が必要と考える。そして、遠隔授業の内容については翌週の対面授業で振り返りを行い、重要な箇所は更に解説を加え理解の定着を図った。その為、その日の授業の進行に支障をきたすこともあった。

また、遠隔授業を利用して、「乳児の遊びと保育者の関わり」の単元では、乳児のための手づくり玩具を制作するという取り組みを行った。事前の対面授業で乳児の発達に合わせた遊びや玩具、遊びを通して身につく機能や育ちについて学んだことを踏まえて、各自が身の回りにある廃材等を利用して乳児向けのおもちゃを作成した。そしてその一部を対面授業で発表、共有を図った。この様に遠隔授業の内容に学生の主体性活動を取り入れ変化をつける工夫を試みた。

【成果と評価】

学生による後期授業評価アンケート（5段階）の結果をもとに、成果と評価を述べる。回答者数は72名であり、回答率は94%であった。設問項目ごとにみると [I] 授業の計画について 「1、この授業はシラバスに示された授業内容に基づいて進められていた。」4.53、「2、急な休講や補講、教員の遅刻や早退などは無かった。」4.68、「3、授業の開始時間や終了時間は守られていた。」4.63 といずれも保育科平均および全体平均と比較して高い評価であった。[II] 授業の内容について 「4、この授業は興味や関心が持てた。」4.60、「5、この授業は自分のためになる授業だった。」4.69、「6、授業の目標がわかりやすく示されていた。」4.63 と、この項目についても高い評価を得られた。なかでも授業が自分の為になったと回答した学生が多くいたことから本授業の目標が概ね達せられと理解できる。[III] 教員の教え方について「7、教員の言葉は聞き取りやすかった。」4.67、「8、学生の理解に合わせて授業が進められていた。」4.49、「9、教科書、板書、配布資料、視聴覚教材、実演などは、授業内容の理解に役立った。」4.54、「10、授業に集中できる環境、雰囲気を整っていた。」4.60、「11、学生の質問に対して適切に対応していた。」4.51 であり、教員の教え方についても平均値を上回っていた。[IV] 授業の成果について「12、私はこの授業に意欲的に取り組んだ。」4.57、「13、この授業を通して、新しい知識、技術、能力が身についた。」4.61 であった。これらの結果から、学生が本授業に対して満足し、専門的な知識を得たと認識した事が理解できる。

以上、これらの評価を大項目で見ると、次のような結果であった。

設問項目	科目平均	保育科平均	全体平均
I. 授業の計画について	4.61	4.40	4.42
II. 授業の内容について	4.64	4.27	4.23
III. 教員の教え方について	4.56	4.23	4.25
IV. 授業の成果について	4.59	4.34	4.31

数値上は全体的に評価が高く、学生自身が学びを得たことが示された。

しかし、従来対面で学ぶべきことが充足できたとは捉えられない。今回、事前の準備を除けば確かに体力的には楽であった。が、本来、授業は啐啄同時に例えられるように、教えるものと学ぶものが向き合い、教師は学生の表情や反応を観ながら適切な対応をタイミングよく行い、進めるものである。また、一方的でなくコミュニケーションを図りながら授業を行う中でそのクラスの雰囲気や学生の個性を見定め、それに合わせて授業も工夫を凝らす。勿論、教える側の力量も問われるが、互いに直接かわることで相手の良さを認め、関係性が深まる中で質の高い授業が成立すると考える。そして、学生間においてもクラスメイトと意見を交換できる主体的、対話的な学習は様々な利点があるが、今回は対面授業であっても感染防止の為、そのような場面は設定できなかった。そう思うと学生それぞれのもつ能力を引き出せずに終わったのではないかと反省する。

保育者養成課程は、現場で通用する人材の育成であり、現場で起こりうる様々な課題に対して自分の力で対応できる保育者を育成しなければならない。養成校では、身近な教員の姿がモデルであり、授業や学生とのやり取りを通して、知識や専門性、実践力が身につくと考える。残りの履修期間、学生一人ひとりの課題に寄り添いながら、それぞれの成長を支援していくことが求められる。

【今後の課題と改善計画】

今年度のFDの課題は遠隔授業の取り組みであった。PC操作が不得意な私にとっては苦勞の連続で、若い教員にぜひぶん助けてもらった。次年度より新教学システムが導入される。新システムの対応と視聴覚教材を効果的に用いる一層の努力が必要である。そして、どのような状況下でもわかりやすい授業を心掛け、魅力ある授業の工夫、学生が学びの実感を得られる授業を展開したい。

また今回、一部の学生に不可を出してしまったことを課題とし、一斉指導を行いながらも個々の学生のレベルに合わせたきめ細やかな指導の充実と方法を検討しなければならない。

保育者養成校としての責任を常に意識しながら、保育者を目指す学生には授業を通して、保育に関する基礎知識だけでなく、学生自らが課題に取り組む姿勢を身に付け、将来、子どものための保育を実現できる保育者を育てるのが最終目標である。

【参考文献】

馬場耕一郎 編著「乳児保育」ミネルヴァ書房

保育実習指導Ⅱの授業における 遠隔授業の取り組みについて

金谷有希子・保育科

【科目名】

保育実習指導Ⅱ

【授業概要】

保育実習の意義と内容を理解して、保育について総合的に学ぶ。実習経験を踏まえて保育の実践力を高めるとともに、保育士の専門性と職業倫理について理解する。

保育所実習の事前事後指導を通して、実習の総括と自己評価を行い、保育に対する課題や認識を明確にする。実習後、実習体験の発表、担当教員との個別面談指導を行い、実習の総括としてレポートを作成する。授業の時期や内容については、状況に応じて柔軟に対応する。

【科目の到達目標】

学修成果の領域		学生の到達目標
◎	技能・表現	子どもの自主性を重視した保育を立案、研究に意欲的に取り組み、実践力を身につける。
○	知識・理解	子ども理解を深め、子ども一人ひとりの状況に応じた適切な対応ができる。
△	思考・判断	保育者としての使命感・責任感を持って、子ども一人ひとりを大切にしたい保育が展開できる。
△	知識・理解	真の愛情で子どもを受けとめ、平等に関わる姿勢ができる。

【実践した内容】

今年度は新型コロナウイルス感染拡大防止対策にともない、対面授業と遠隔授業を隔週で行うこととなった。本授業では、前期8回遠隔授業を実施、残りの6回は対面授業を行い、後期は全回対面授業を実施した。8回の遠隔授業の内容は次の通りである。

- ①第1回目 保育実習Ⅰの振り返りと保育実習Ⅱに向けての課題整理、実習園調査
- ②第2回目 養護技術（授乳・オムツ交換）の方法についての復習
- ③第3回目 乳児クラス向け手遊びの習得
- ④第4回目 幼児クラス向け手遊びの習得
- ⑤第5回目 保育所保育指針の内容を読み解く
- ⑥第7回目 保育実習Ⅱの研究テーマ作成
- ⑦第9回目 保育場面の事例検討
- ⑧第13回目 責任実習に向けての準備

どの遠隔授業においても、授業開始時または前回授業時に課題を提示し、授業終了までにGoogle フォームまたは写真添付により課題を提出する方法をとった。授業中の学生からの質問や限定コメントには、可能な限り速やか

な対応を心掛けた。授業終了後は提出された課題内容の確認を行ない、次回対面授業時に解説及び内容の共有を図った。提出内容について、指導が必要な学生に対しては対面授業週に対象学生に個別の指導を行った。

【成果と評価】

授業評価アンケート結果（5段階評価）は次の通りであった。「Ⅰ. 授業の計画について」4.44、「Ⅱ. 授業の内容について」4.34、「Ⅲ. 教員の教え方について」4.38、「Ⅳ. 授業の成果について」4.39と科平均、全体平均ともにやや上回る結果であった。

本科目の大きな目標である「実習の事後指導を通して、実習の総括と自己評価を行い、保育に対する課題や認識を明確にする」ことについては、4000字レポート作成を通して学生たちの学びの成果を確認することができた。

【今後の課題と改善計画】

今年度より保育実習指導Ⅱの授業を担当したが、遠隔授業という思わぬ形での授業開始となった。学生側も教員側も遠隔授業は初めての取り組みであり、開始当初を振り返ると戸惑いながらのスタートであったように思う。授業評価アンケートは概ね肯定的な評価ではあったが、遠隔授業では課題を提示し時間内に課題をこなすのみとなってしまう、双方向的な授業や能動的な授業に欠ける内容であったと感じている。本科目は1回50分通年科目であるため、50分間の遠隔授業の中で双方向のやり取りができる授業には限界があるかもしれない。しかし、より効果的な授業にするためには課題の提示方法や教材の使用法などを再検討する必要がある。

一方、遠隔授業を振り返る中で有効に活用できたと思われる方法もあった。それはGoogleフォームの利用である。遠隔授業ではアンケート収集や課題の解答回収にGoogleフォームを用いて行った。回答の分析を即座に行うことができ、その結果を授業に反映することができたように思う。また、実習までの事前指導では実習園の調査など学生たちが円滑に実習に参加できるための準備も不可欠である。これまでは、実習Ⅱに向けての聞き取り調査を授業内で行っていたが、Googleフォームを用いることにより調査時間を大幅に短縮することができた。また結果をすぐにスプレッドシートで一覧表示できるため、管理も便利となった。遠隔授業を行わなければこの方法を使用することはなかったであろう。

来年度の授業はすべて対面授業で行う予定となっているが、Googleフォームの利用や本学FD研修会での他教員の授業法も参考にしながら、有効に活用できる方法は来年度も授業の中で実践していきたいと考えている。ただ、その際はスマートフォン等の情報機器を使用することとなるため、授業内でのスマートフォンの適切な使用方法について注意を促しながらメリハリのある授業を行いたい。今年度使用したGoogle Classroomの活用法や対面授業の授業内容について日々研究を重ねながら、学生一人ひとりにきめ細やかな指導をしていきたいと考える。

【参考文献】

文部科学省総合教育政策局 生涯学習推進課専修学校教育振興室 「新型コロナウイルス感染症対応に係る専修学校における遠隔授業の取組事例集」 https://www.mext.go.jp/content/20200515-mxt_kouhou01-000004520_2.pdf 令和2年5月

子ども家庭支援論の遠隔授業における、アクティブラーニング の試みについて

桑原 徹也・保育科

【科目名】

子ども家庭支援論

【授業概要】

ソーシャルワークの理念・原則・方法を解説する。また、和歌山を中心とした子育て支援の取り組みを紹介し、子どもとその家庭への支援について、事例をもとにワークシートを活用し理解を深める。

【科目の到達目標】

1. 子ども家庭支援の必要性を理解し、場面に応じた対応ができる。
2. 対象者を理解し、尊厳を持った態度を修得できる。
3. ニーズに応じた支援の展開について、自分の考えを持つことができる。
4. 保育者としての責任を持ち、支援に取り組む姿勢が身についている。

【実践した内容】

「子ども家庭支援論」の授業では、主に実践事例を用いたワーク形式の授業を行った。事前に、次回授業で使用する事例プリントをPDFでアップし、内容確認と、分からない用語を調べておくことを課題とした。また、授業では、グーグルクラスルームのコメント欄や、フォームを主に活用し、授業を進行した。

オンライン授業で、懸念されることは、①授業への参加態度、理解度の把握、②学生間の意見交換、③集中力の確保、の3点が考えられた。

①授業への参加態度、理解度の把握について、毎回授業の最後にグーグルフォームのテスト機能を使った確認テストを行い、授業内容の理解度を確認した。採点機能と解答に対する解説をフォームに作成しておくことで、学生は解答後すぐに自分のスコアと誤解答の復習ができるようにした。②学生間の意見交換について、クラスコメントおよび、限定コメントを活用し、リアルタイムでの意見交換の機会を設定した。クラスコメントでは、ほぼ全ての学生がコメントを残した。限定コメントについては、個別の質問等に活用された。さらに、グーグルフォームにて、設問課題を示し、記述式の解答を求め、学生の解答を集約し、次の授業でコメントを加え紹介した。③の集中力の確保について、授業の進行は、基本的に文字入力の方法をとったため、一度に大量の文字をアップするのではなく、アップする範囲を区切り、更新時間を示しておくことで、進行中の範囲と時間の明確化を図った。

【成果と評価】

まず、①授業への参加態度、理解度の把握について、フォームに関するアンケート調査を実施した結果、9割以上の学生より、フォーム活用の支持を得られた。その内容では、記述式とドロップダウンリスト等を使ったチェック式について、どちらが良いかアンケートをとったところ、記述式が20.2%、チェック式が79.8%となった。その

理由として、「文字の打ち込みに時間がかかる」「通信状態や操作ミスにより、せっかく書いた長文が途中で消えて最初からやり直すことがある。」といった理由が聞かれた。これらのことから、対応可能な設問については、できる限りチェック式を採用するとともに、記述式の課題については、フォーム毎に1問ないし、2問に留め、所要時間の効率化と操作ミスのリスクを抑えることとした。次に解答に対する解説について、88.9%の学生が必要であると回答した。解説の充実度について、5段階で確認したところ、「とても分かりやすい」が45.5%、「おおむね分かる」が44.4%、「普通」が10.1%、「もう少し詳しく」が0%、「まったく分からない」が0%と、その有用性が明らかとなった。

次に、②学生の意見交換について、クラスコメントを使ったディスカッションの必要性をアンケートしたところ、「取り入れてほしい」が12.1%、「どちらでもよい」が76.8%、「いらない」が11.1%となった。賛成意見としては、「他の学生の考えがよくわかる」「一つの課題に対して皆で意見交換ができる」「教室で手を挙げるより発言しやすい」といった意見が多く見られた。反対意見として「同じ意見が先に出ているので発言しない」「話題が進んでいくのでタイミングを逃す」「スマホでの更新が一度スワイプしなければならぬので一番下まで画面を持ってくるのに操作し辛い」「打ち込んでいる間にコメントが増えているので、流れを把握するには投稿せず、見ている方が分かりやすい」といった意見が見られた。オンラインで一方通行の授業が多い中、クラスコメントでの他学生との意見共有という点では賛同を得る反面、操作性の課題や、時間を要する割には、充実度が低い様子が伺えた。また、記述式フォームでの解答と次の授業でのフィードバックについては、9割以上の学生より支持を得ることができた。1週間が空いてしまうという時間差はあるものの、取りまとめた形で他者の意見を共有できるという点で賛同が得られたと考察される。

最後に、③の集中力の確保について、アップする範囲を区切り、更新時間を示しておくことについては、「時間が指定されているので追われることなく、集中することができる」といった評価を得ることができた。アップする範囲や時間設定の妥当性については、今回調査できていないため、今後検討が必要とされる。

【今後の課題と改善計画】

当該教科はオンラインが始まった前期授業であったため、教員、学生とも不慣れななかで開始した。一年を通して、オンライン授業を展開するなかで、すでに解決された課題もあると思われる。コロナ禍での策として始めたオンラインの試みであるが、今回の結果より、ICTの活用は、特に、リアルタイムに意見を集約し、グラフ等で全体にフィードバックできる点など、対面授業のなかでも、取り入れる有用性がみられた。課題として、現段階では、デバイスが学生個人に頼っているため、所持する機器によって効率性に差が生じること、また、その通信費の保障などが考えられる。今後、対面授業のなかで、取り入れていくためには、まず、これらの課題を整理していく必要がある。

【参考文献】

なし

音楽指導論における遠隔授業の取り組みについて

田原淑子・保育科

【科目名】

音楽指導論

【授業概要】

保育現場で使用する様々な教材について解説し、内容を深く理解するとともに適切な表現方法と指導のポイントを探る。手あそび・指あそびをできるだけ多く習得し現場での指導に役立たせる。

〈キーワード：弾き歌い曲・手あそびうた・園行事・季節感・教材研究〉

【科目の到達目標】

保育現場における音楽表現の意義と内容を理解する。

表情豊かに楽しく指導する能力を身につける。

子どもの表現活動に興味を持つことができる。

積極的な学習態度を身につける。

【実践した内容】

ピアノの授業で取り組んでいる弾き歌い曲について、曲に盛り込まれた内容を理解したうえで実際の演奏では豊かな表現力へと反映できるように教材研究として実演を交えながら解説した。歌の表現力という観点から、歌詞の朗読をはじめとして言い回しを復唱させることや、発音の明瞭さや声の明るさや暗さなどその曲ごとに合った声の出し方なども指導した。また歌詞の内容把握という観点から、言葉の意味・歌詞に出てくる動植物・気象・自然現象・季節・食物・行事など幅広く取り上げ画像等を見せながら解説した。さらにピアノ伴奏における表現に関して和音の響きと音楽の方向性の関係やその曲に合ったタッチ、歌とのバランス等を演奏で提示しながら解説した。

手あそびは教科書や配布プリントをもとに全員であるいはグループで練習させた。

弾き歌い曲や手あそびうたなどを季節や園行事との関連を持たせるため、一覧表にまとめさせた。

本来の計画ではもっと学生自身にも声を出し、朗読、歌唱、手あそびの実演などを毎週継続的に行い、体感すると共にレパートリーも増やしていくことにしていたが、遠隔と対面の交互授業となり、内容を少し修正しミートでの解説を軸に授業を行った。そのかわりに保育現場で使用する打楽器（カスタネット・鈴・タンブリン・トライアングル等）の保育現場での指導法（扱い・演奏法・指導における注意点）とそれらの楽器を想定したリズム譜の書き方を追加内容として授業に取り入れた。また、遠隔授業での課題として「あんたがたどこさ」などのわらべうたの歌詞を調べさせ課題提出フォームで提出させ、次週の対面授業でメロディーを付けて歌い、歌詞の内容や遊び方の説明を行った。

【成果と評価】

前期の「音楽表現の基礎」の授業では解説部分をビデオに録画しYouTubeの形でGoogle Classroomにアップした後、解説内容に基づく練習問題を課題としてやるようにした。が、YouTubeは時間的制約もあり、できるかぎ

り言葉を選び解説したが、本来ならば学生の表情を見て、理解ができていなさそうな顔つきであれば繰り返し説明するところを一回きりの説明となり、理解できているかどうかわからないままの一方的な授業の進め方になった。そのため理解が不完全なまま問題に取り組み間違った回答を次週の対面授業に持ってきて、答え合わせするときに再度解説することが多く、時間が余分にかかり授業の進め方に大変苦労した経緯があった。そこで後期の「音楽指導論」の遠隔授業ではミートを使い、その回は、楽曲の解説を中心に授業を進めることにした。時間の終わりには答えは比較的簡単であるがその授業の中の解説を聴いていないと答えられないような問いや知っているはずで答えられるような（知らなかったとしても調べればすぐわかる）わらべうたの歌詞をノートに書かせ写真を撮りそれを課題として提出させた。対面授業では実際に歌ってみる事や打楽器等の楽器に触れる事、グループでの手遊びの練習などその場でしかできない内容のものを行った。感染予防の面でも気を遣う点があり、歌うこともマスクしたままで回数も極力少なくし、楽器の使用するについても手指消毒をしたり、手遊び等についてもお互いの手をつないでする動作はしたつもりで行うなどなかなか時間もかかる割に楽しさが半減することもあった。ミートでは通常の授業の様に説明ができ、大事な点は繰り返し言う事や適宜実演も交えながらの解説で時間的に自由度が増した感があった。しかしミートにしても学生は80名ちかくいて、数名の会議の様にやり取りはむすかしく、一方的な講義とならざるを得ない。途中で学生からの質問コメントがあっても、ミートをやっているとのコメントを見る画面にできない。そこでもう1台パソコンを用意し学生のコメントを見ることができる状態にはしたが、解説をしながらか限定コメントを見るという余裕はなかった。講義の内容は楽曲解説や奏法や表現の技術の模範演奏ではあるが、単に音楽の事ばかりでなく動植物、自然、食物、風習、行事など多岐にわたっているため写真をアップして見せたり、至ってアナログではあるが大事なキーワードについてはフリップに文字を書いて見せたりした。学生には再三にわたって必ず解説内容はノートに取ることを促していたので、真面目に取り組んだ学生はそのように行動出来ていた。

【今後の課題と改善計画】

後に学生から聞いたが、ミートでは、ピアノの音はとても良くマイクで拾って聞こえるが、ピアノを弾いた直後の話す声が途切れたりしていたらしい。パソコンと座る位置の具合で音声の調子が良くないことがあったようである。またスマホで授業を受けている学生がほとんどであるが、写真やフリップ等がどんなふうに見えるか分かりづらい。アップした写真等は引き伸ばしたりして見やすくはなるが、そのようなことをしていると説明と時間がずれていくと思われる。その時々に応じて話すスピードも考慮していく必要があったと思う。

ノートに書かせたものを写真に撮り課題提出フォームにアップして提出させることをしたが、提出後の添削にとっても時間と労力がかかった。しかしこの作業によって一人の学生が書いたものを数名が使いまわして提出していたことが筆跡等で分かった。学生が自宅で一人で遠隔授業を受けているという保証はないし、別なところにいるとしてもお互いに写真等のデータを送ってそれを使う事も可能である。通常授業であれば、その時に一斉に課題をさせて発表させ、或いはその時に机間巡視で点検することが可能なので時間も無駄なく、どの学生に対しても教育効果が上げることができる。真面目にやっている学生とそうでない学生、理解力が早い学生とそうでない学生の学習成果の差は遠隔授業において通常授業よりさらに広がるといっても過言でない。

私自身がグーグルクラスルームのミートをはじめとしたシステムを使いこなせていないという事もあるが、グループでの意見交換や調べたことをまとめたりするといったことも、取り入れて多様な授業展開にしていくことも必要と思われる。

手遊びやわらべうたの学習においては、個人やグループでの実演練習が大切であり、さらにそれが継続的に行われてこそ感性や表現力やさらには指導力が身につくものである。遠隔授業ではこの点に関して非常に厳しいものがある。日本音楽教育学会のニューズレターに掲載されている「教員養成大学における前期のオンライン授業報告と

今後の課題」について、Zoom 報告会で共有された認識と課題は、下記の通りとなっている。

- ① オンラインではZoom などによる「同時双方向型」の、いわゆる従来の対面型に近い授業形態と。事前収録による「異時オンデマンド型」の組み合わせが、有効。大人数であっても、Zoom ライブ授業（学生もチャットなどで主体的に参加）→そのまま録画→大学のLMS（学習支援システム）へアップ→異時オンデマンド型の「繰り返し復習」が可能。副産物として、ライブ欠席者も授業録画を視聴すれば、出席扱いにできる。結果、出席率はほぼ100%となる。
- ② オンラインでも、アクティブ・ラーニング型学修やクリエイティブ・ラーニングにより、学生たちは教員の想像を超えて、みずから工夫をして学修を深められる。学生の可能性を信じる。
- ③ 教員からの一方通行の授業が、学生には一番不評。フィードバックは絶対に必要。その分教員側も負担増。また、学生のメンタル・ケアが、対面授業以上に必要である。
- ④ 対面でないと、授業実践のタクティクスを身に付けることは難しい。とりわけ、実技・実習系は、オンライン授業では限界がある。後期は、対面とオンラインの「混合型」が模索される。
- ⑤ 同様に、合唱・合奏は現状の会議ソフトではほぼ無理である。「共に音楽する」体験、「生の音楽」こそが、音楽の本質的なあり方だと、再認識される。「生」に接する機会としてのアウトリーチ活動も重要。
- ⑥ 「音楽文化の継承・発展・創造」が危機にさらされている。オンライン下でも「教員・学生・社会」をどう結びつけるかが、大学の課題である。（野本由紀夫）

本学においては遠隔とオンライン交互の形で授業が進められてきたおかげで、なんとか学修内容が保たれたと思いたい。が、教員側も学生側も満足度は厳しいと感じる。オンラインを行うにはそれなりの環境設備は不可欠であると思う。

【参考・引用文献】

野本由紀夫 教員養成大学における前期のオンライン授業報告と今後の課題—Zoom 報告会 日本音楽教育学会ニュースレター第82号 2020.12.18

音楽の授業における遠隔授業の取り組みについて

仲谷 徹子・保育科

【科目名】

音楽

【授業概要】

ヨーロッパにおけるキリスト教の西洋音楽史(宗教音楽)・美術史に触れながら、現代も歌い継がれている楽曲への理解を深める。聖歌やオルガン曲、ミサ曲、オラトリオ、有名なオペラ、ミュージカルの鑑賞、楽器への洞察など、幅広い観点から音楽について学ぶ。また、歌集「歌はともだち」教育芸術社の中から数曲を例に挙げ、文部省唱歌、日本音楽の変遷、日本音階などの解説を行う。本学で歌われている『賛美の歌』の中から聖歌を歌い、ミサ曲や宗教音楽について触れる。

【科目の到達目標】

- 1) 西洋音楽の中の宗教音楽について学び、祈りの音楽とはどういう事かを理解する。
- 2) 聖歌や歌・手遊び歌などの楽曲における作曲者の思いや作品の内容などを知り、自らの実践に役立てるようにする。
- 3) グループで課題を発表し合いながら、音楽的に演じるとはどういうことかを、考察出来るようになる。
- 4) 自らが経験して知っている曲について、詳しく理解できるようにする。
- 5) 音楽史やオペラ・オペレッタ・バレエ音楽・器楽曲などを学び、実践に役立てるようにする。

【実践した内容】

本年度は、遠隔と対面授業の入れ替わりの形態となったので、遠隔授業ではパワーポイントの資料を元に音楽史などの解説を行い、対面授業の時に鑑賞や演奏を行った。ミートでは、ピアノ伴奏に合わせて歌の指導も行った。対面授業の中で、幼児の歌や子どもの歌の内容に合わせてペープサートを作成し、お互いの発表を行った。音楽的に表現することや、効果的に見せるアイデアなどを紹介して、自らの実践に活かせるように考えた。宗教曲の説明では、本学で使用されている『賛美の歌』を参照に、ミサ曲や聖歌を歌いながらキリスト教の教会音楽についての解説と西洋音楽の中での意味合いを考察した。

・鑑賞曲

グレゴリオ聖歌 “Dies irae” “Kyrie Eleison” “平行オルガスム” Rex caeli“

ギョームド・マショー作曲 “Kyrie Eleison” ヘンデル作曲 オラトリオ”メサイア”より”ハレルヤコーラス”

バッハ作曲 トッカータとフーガ 二短調 ヴィヴァルディ作曲 ヴァイオリン協奏曲“四季”

モーツァルト作曲 “アイネクライネナハルトムジーク” ベートーヴェン作曲 交響曲第5番“運命”

ショパン作曲 “別れの曲”、“ノクターン”第2番 リスト作曲 “ラ・カンパネラ”

ブルグミュラー作曲25の練習曲より “素直な心” “狩り” “貴婦人の乗馬”

チャイコフスキー作曲“くるみわり人形”より抜粋 プッチーニ作曲 オペラ“蝶々夫人”より「ある晴れた日に」

ヴェルディ作曲 オペラ“アイーダ”より「凱行進行曲」 ドビュッシー作曲 “夢”、交響曲“海”

山田耕作作曲 “赤とんぼ” 小山作之助作曲 “夏は来ぬ” 岡野貞一作曲 “もみじ”

・歌った聖歌と参考曲

グレゴリオ聖歌 “Kyrie Eleison” あわれみの賛歌 しあわせな人 遠く地の果てまで

わたしの心は神のうちによるこぶ しずけき あめのみつかいの もろびとこぞりて

夏は来ぬ ふるさと もみじ 里の秋 茶摘み にじ 大切なもの 青いお空に絵を書こう

Believe Edelweiss 翼をください

・ペープサート作成と発表の曲 “にじ” “青いお空に絵を書こう”

・手遊び歌 “あおむしでたよ” “コロコロたまご” “あじのひらき” “のぼるよコアラ” “まあるいたまご”

“どどっこやがい” “ちゃつぼ” “鬼のパンツ”

【成果と評価】

遠隔授業で西洋音楽史の解説を行い、対面授業では楽曲の鑑賞や解説・実践をする形式を取った。回を重ねる毎に理解を得られたように思う。遠隔授業の資料は、文字を大きく、写真やイラストなどを使って、わかりやすく伝えられるように心がけた。不安に感じた点は、機材の準備、通信トラブル、学生が参加できているかどうかであった。その他、マイクをつなげて一緒に歌を歌うことも行ったが、ネットを通しての声なので相手にどのように聞こえているのかわかりづらく、細かい部分は教えられていないように感じた。学生もこちらからの音源が途切れる事もあり、自分の声がどのように聞こえているのか不安に感じたようである。

良い点は、共有のファイルを見ることが出来たのは便利であった。それから、質問にはすぐに返答があり、参加出来ているのか確認は取れていた。授業はグレゴリオ聖歌の四線楽譜、西洋音楽(宗教音楽)・美術史の解説、日本音楽の変遷などに触れ、学習している曲(ピアノ曲・弾き歌いの曲)に対する理解につながったように感じた。また、楽曲を演奏するための簡単なコード付けや、楽曲の練習・ペープサートの作成・発表、ハンドベルの演奏・手遊び歌も行ったので、音楽への興味につながった。

授業評価アンケートでは、「学生の理解に合わせて授業が進められていた」4.83/5.0 ポイント。「教科書、板書、配付資料、視聴覚教材、実演などは授業の理解に役に立った」4.83/5.0 ポイント。「この授業を通じて、新しい知識、技術、能力が身についた」は 5.0/5.0 ポイント。「この授業は興味や関心が持てた」5.0/5.0 ポイントであり、学生の興味・関心を深めることができた。

【今後の課題と改善計画】

コードネームについて何度もコード付けを行ったが、十分に定着するまでに至らなかった。特にミートでの授業では、学生がどこで間違っているのかわかりづらいという点があった。次の対面授業で指摘をするが、その時は理解を得られたと感じたが、ミート授業になると一から説明を繰り返さなければならなくなったりした。リモート授業での伝わり方をよくイメージして準備しておかなければならなかったと考える。今後は楽譜を見て何調か判断し、コードを作成できるような力をつけるようにしたい。

【参考文献】

グレゴリオ聖歌(水嶋良雄 著)音楽之友社出版 西洋音楽史(柴田南雄 著)音楽之友社出版

音楽辞典(浅香 淳 編集)音楽之友社 典礼聖歌(新垣 壬敏、高田三郎他)あかし書房

幼児の四季(早川史郎 編曲・編纂)株式会社atn たのしい手あそびうた 阿部恵編著 ナツメ社

5訂版 歌はともだち(教育音楽研究グループ編集)教育芸術社

コロナ禍における授業実践

～新入生の「保育の学び」への興味関心を引きつけるために～

西原 弘・和歌山信愛女子短期大学

【科目名】

子ども家庭福祉

【授業概要】

子どもを取り巻く様々な問題を考えていく上で、必要な知識を学習し、実際に起きている事柄を分析できる力を身につけていく。子ども家庭福祉の意義と歴史の変遷、保育との関連性及び児童の人権について学ぶと共に、子ども家庭福祉の制度や実施体系、現状と課題、子ども家庭福祉の動向と展望についての理解を目指す。

【科目の到達目標】

児童虐待、DV、いじめ等子どもを取り巻く様々な問題に触れることで、身近に起こりうる問題として関心を持ち、なぜ問題が生じるのかを考え、子どもの最善の利益を守り問題解決に向けた取組や必要とされる援助技術、関係機関との連携のあり方について学習する。又、専門職としての責務、児童観、保護者観を養う。児童の権利擁護、家庭支援等地域福祉についても理解を深めていく。

【実践した内容】

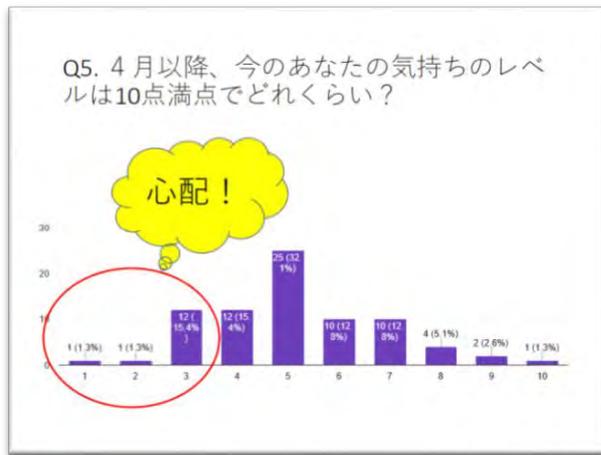
本授業の開始は4月28日（火）で、入学から約1ヶ月、高校の一斉休業から2ヶ月を経過しており、Stay home を実践している学生たちにとってストレスフルな生活のピークで更に慣れない遠隔授業による開始であった。本来なら「短大生になれた」新しい人生のスタートに胸躍る時期であるのに、不安だらけの学生生活のスタートであるので、できるだけ学生たちの気持ちを視覚化し、全員で思いを共有できる場所が「オンライン教室」であるよう、試行錯誤しながら行った。

1. 気持ちの視覚化

出席確認は、Google フォームで出席カードを提出する方法を採った。ただ、名前と出席番号を記入させるだけではなく、「今の気持ちを一言で表すとすれば…」 「今、やりたいことは何か？」等、簡単に答えられる質問も加えて採るようにした。その結果も授業の中で発表することで、「皆が同じような気持ちになっている」「私だけじゃないんだ…」など、共感する感想が授業終了アンケートで多数聞かれるなど「会ったこともないけれど繋がりたい」という学生の思いを知ることができた。そのため、毎回採るアンケート結果はその講義時間中に公表するようにして双方向のやりとりができるよう、心がけた。

アンケート結果 (速報値)

子ども家庭福祉



【図 アンケート結果の公表（第1回授業から）】

2. 遠隔授業に主体的に取り組める工夫

(1) テキストベースの読み書きに偏った進め方ではなく、視聴覚教材を用いた授業

第1回目は、テキスト表示で課題指示をテキストで行うスタイルを採り、チャット形式で応答性を高める工夫もしたが、スマートフォン操作で慣れないアプリを動かしながら問いに応じていくやり方では集中力に限界があった。そのため、2回目は事前に講義を15分程度で録画したものを3本用意し、1つを視聴して課題に取り組み、次の視聴を行うスタイルに変更した。アンケート結果は好評で、「声が聞こえることで、大学で授業を受けている雰囲気味わえる」「読むより聞く方がわかりやすい」といった意見が多く上がった。Youtubeに講義映像データを置き、ビデオオンデマンド方式を採用したが、早送り機能を使ってビデオ上映時間より早く回答フォームに回答送信する学生も出てきて、不十分さを感じる点もあった。このスタイルの授業は第2回・第3回で行った。

(2) Google Meet を用いたビデオミーティングシステムによる授業の実施

少しでも大学での講義を体感してほしい思いから、第4回目よりGoogle Meetを用いたビデオミーティングシステムによる授業の実施を行った。以降、6月より対面・遠隔の並行授業の間、遠隔ではビデオミーティングシステムによる授業を6回行った。(対面授業は5回)

事前に録画したものを製作するのは大変な時間と労力を使ったが、ビデオミーティングによる授業配信では、教室でパワーポイントをホワイトボードに投影した状態で、時にはホワイトボードに書き込んだり、新聞記事なども写したりしながら、普段行う授業スタイルで実施した。学生のパワーポイント資料の印刷負担をなくすために、対面授業

時に翌週の遠隔授業のパワーポイント資料を配付するようにし、予習にも活用してもらえるようにした。初めて行った第4回の授業終了アンケートでは、多くの学生が「大学で講義を受けている気持ちになれた」「わかりやすかった」と好意的な意見で占められた。教室からの授業中継は、まだ大学の講義を受けたことのない学生にとって大変新鮮に思えたことであろう。

システムにお互いが慣れてくると、まだ学生側から画像を送ることを要求することはしなかったが、指名して質問に答えることも行った。「出席番号〇番 〇〇さん、マイクをオンにしてください」と指示すると、音声で回答させた。普段、教室ではなかなか発言できない学生も、マイクであればしっかり話できることもわかり、発表者の考えを聞いた他の学生も「他人の考えを聞いて、自分と同じだったんだ（そういう考え方もあるんだ）と思えた」と授業終了アンケートに答える学生が多く見られた。

【成果と評価】

授業評価アンケートでは、「学生の理解に合わせて授業が進められていた」4.57/5.0ポイント。「教科書、板書、配付資料、視聴覚教材、実演などは授業の理解に役に立った」4.68/5.0ポイント。「この授業を通じて、新しい知識、技術、能力が身についた」は4.74/5.0ポイント。「この授業は興味や関心が持てた」4.70/5.0ポイントであり、学生の興味・関心を深めることができた。

回答数75に対して46の自由記述によるコメントがあったので全てを紹介する。

・聴く話はいつも胸が苦しくなって泣きそうになります。先生の授業は保育者になってから子ども・親の救いになりたいと思えるようになります。

- ・聴きやすい声とスピードで良かった。(3)
- ・とても色々なことを学べた気がします。興味深い授業でした。
- ・自分たちの目線で色々と工夫してくれた。
- ・この授業の先生の話はとても興味が湧きます。(4)
- ・先生の話し方や学生に対して優しいところや先生の昔のエピソードなどが聴けて良かった。
- ・授業がとても聞き取りやすく、先生の実体験の話を聴いて学んだことがあり、前期の授業の中で一番理解できた。(9)
- ・遠隔でも対面でもパワーポイントを使ってわかりやすく説明してくれたので、すごくわかりやすくて良かったです。(8)
- ・先生の体験談、経験話を聞くのがすごく貴重なことだと思いました。(8)
- ・授業をまとめたプリントがわかりやすかった。(2)
- ・授業を通じてたくさんを知ることができたし、色んな子どもたちの少しでも助けになれば、と思いました。
- ・meetでの授業が遠隔授業でも「(大学で)授業している」という気持ちになれてよかったです。(2)
- ・どの教科よりも一番関心を持てる授業。
- ・自分の将来に役に立つ授業だと思った。
- ・とてもわかりやすかったです。とても熱心に教えていただいてとても勉強になりました。(2)

【今後の課題と改善計画】

私は今年度をもって退官し教育界から退くので、今後の課題を挙げること・改善計画を立てることは省略する。コロナ禍において、我々は授業スタイルをこれまでの「チョーク&トーク」を大きく変えていかなくてはならない。授業のUD化にも通じることであるが、どのような環境下においても、我々は常に「わかる授業」を提供する

義務がある。コロナ禍における保育現場を支える保育専門職養成校の義務を果たせるよう、これからの先生方のご活躍に期待している。

「国語表現」における遠隔授業の取り組みについて

二平 京子・保育科

【科目名】

国語表現

【授業概要】

母語としての国語に関する基本的知識を深め、子どもの言葉の発達への理解を深める。また、子どもたちの言葉の成長に関わる者として、自らの言葉への感性を高める。主に書き言葉の習熟と、日常のコミュニケーション及び、自己表現能力の養成を目標とする。【敬語、スピーチ、言語・文字】

【科目の到達目標】

学修成果の領域	学生の到達目標
◎ 保育内容の理解	子どもの心身の発達過程と特徴を理解し、適切に対応できる
○ 保育の指導力	明瞭な発音・発声で、園児の表現を引き出し、適切に指導する力を身に付ける
△ 子ども理解	子ども達の内面に生じる様々な動きに気づき、共感をもって接することができる
△ 統合的な学習経験と創造的思考力	自己を正しくわきまえた言語表現と、豊かで円滑な対話力を培う

【実践した内容】

本科目は、保育士資格取得における選択必須科目であるため、社会人として求められる国語表現の習得だけでなく、保育士として子どもの言語活動を援助する方法を身につけることを目標としている。単位取得を主眼に置く学生や、国語に関心を持つ学生が主に受講するため、毎年人数は2～5名程度で、今回も3名という少人数の授業であった。よって、この特徴を活かし、それぞれの学生に応じた細やかな指導を心掛けると共に、是非単位取得に導きたい学生のためには、そのモチベーションを高く保つため、採点基準を明示した上での声掛けを常に心がけ、単位取得までの道のりを示し続けた。

また、シラバスの修正では、対面と遠隔の特長を活かし、両者が補い合って学習効果が上がるよう工夫した。

その中から、今回は、「チャレンジ課題」の「敬語検定」と、「電話応対」の2点について報告したい。

1. 敬語検定

敬語については、1年の「基礎演習」でも学習したが、社会人として必要不可欠な表現スキルである敬語の正しい使い方を徹底させるため、合計3回にわたって授業を行った。そのうち、2回（第6回目、7回目）は遠隔授業、残りの1回（8回目）は対面授業であった。

第6回目の授業（遠隔）では、NHKの動画を用いて敬語の基本を復習した。その後、理解度確認を行うためGoogleフォームで待遇表現等に関する問題を解いた。これに対しては採点し、コメントを付して送り返すこともできた。なお、返信を待つ間は、各自でペン習字の書写を行い、時間を有効に用いた。

7回目（遠隔）は、「チャレンジコース」と称して、学んだ知識に関する応用力を見るための敬語検定に挑戦した。「敬語検定」のテキストから3級43問を抜粋し、Googleフォームを用いて実施した模擬テストである。その結

果に応じて2級か4級のGoogle フォームを案内し、その問題に、再度挑戦した。この方法によって、各自が自分の力を客観的に知り、自分に適した学習内容を選択できた点で主体的な取り組みが可能となった。また、限定コメントで、助言をしたり、感想や理解の度合いを尋ねたりと、双方のやり取りを楽しみながら確認できた。

そして、敬語の最終回である8回目（対面）の前半で、予告通りに「確認テスト」を実施した。問題の8割程度を既に学んだ内容から出題し、2割を応用問題とした。また、確認テスト実施後に、7回目で行ったチャレンジコースのフィードバックとして、2から4級の賞状を授与した。手づくりのミニ賞状だったにも拘わらず、学生は非常に喜んでくれ、その表情は大変印に象的であった。

2. 電話対応

電話対応についてもプリントを事前に配布し、それを手元に置きながらGoogle Meet で授業を展開した。Google Meet での実践練習前には、事前配布した「ビジネス電話の基本マナー」を読む時間を取り、その後、Google フォームで理解の確認を行った。また、電話対応の実践を行う前に電話の対応方法をイメージできるように、「新入社員のための こんなときどうする？仕事のマナー【電話編】」という、誤った対応の例が演じられたyoutube 動画を視聴し、適切な電話対応の方法を確認した。

電話対応における基本的な知識の理解を確認した後、Google Meet を立ち上げ、電話の受け方、伝言メモの取り方、また場面に応じた表現方法などのレクチャーを行い、電話対応の会話例の読み合わせを行った。また、ロールプレーを行うための必要事項を確認した後、学生はペアになって電話の受け方や、伝言メモの作成などの実践練習を行った。ロールプレー後は、出来た点や改善点などについてフィードバックを行い、相手に安心を与える対応への配慮の大切さについての助言をした。

【成果と評価】

本科目の「授業評価アンケート」の評価は、授業の計画、内容、教員の教え方、授業の成果とも、4.67であった。元々、関心度の高い少数の学生が受講する為、比較的評価の高い科目である（「授業内容」の評価例：2017年度4.85、2018年度5.00、2019年度4.00、2020年度4.67）が、遠隔授業を含む今回の評価が、これまでの数値と大差なかった点からは、受講生の達成感が低くなかった事が窺える。また、担当者にとっても大きな手応えの感じられる経験となった。

遠隔授業を学生が良く理解し、達成感を得られるよう工夫した主な内容は以下のとおりである。第一に、なるべく内容を絞るよう心掛け、通常ならば当然加えてきた細かな点についての説明は省くようにした（例えば、敬語における美化後の誤用や、過剰な敬語表現への傾き等について）。担当者としては、多少残念に思う点もあったが、遠隔における理解度を落とさないために不可欠なポイントであったと考える。

第二に、視覚に訴える教材を多く使用した。特に、youtube 動画の利用によって、臨場感のある学習が可能となり、学生の理解が深められた。また、資料には楽しいイラストが効果的に使われている参考書を選んだ。いくらかの説明を加えて使用したところ、学生の興味関心を引き理解を容易に促進する事ができた。

第三に、少人数であった点を活かし、限定コメントの有効な活用を心掛け、個別のやり取りをこまめに行う事を意識した。例えば、電話対応ではGoogle Meet を通して、学生一人ひとりの表情や、姿勢等も細かく確認できたので、適切な指導を即時に行えた。また、敬語学習など難易度の高い内容の時には、限定・公開コメントを有効活用し、励ましやヒントを送るといった個人的な対応ができた。

以上のような学習が学生の生活の中に定着し、例えば、学生たちの美しく温かい日常語が子ども達との関わりの中に伝わり、幼い子供たちの言語感覚を耕す機会となることを期待している。

【今後の課題と改善計画】

上述のとおり、未曾有の経験ながら、学生にある程度の満足感を与えつつ学習を終了できたのは、偏にインターネットの操作を全面的に引き受けリードしてくれたスタッフ及び教務教員がいたからである。もし、この支援が頂けなければ、遠隔時のみならず、対面での学習にも混乱をきたし、成果を上げる事はできなかったと思われる。インターネットを使いこなす力が、現代の教育の場においていかに不可欠な要素であるかを、この度ほど痛感させられた事はない。遠隔授業に対応できるスキルを身につける事が、担当者にとって最も優先すべき緊急の自己課題である。

【参考文献】

『敬語 日本語検定公式領域別問題集』 /東京書籍/速水博司

『日本語表現の教育』 /図書刊行会/今石 元久

『新版 電話応対&敬語・話し方のビジネスマナー』 /西東社/尾形圭子 監修

『新入社員のための こんなときどうする？仕事のマナー【電話編】』

<https://www.youtube.com/watch?v=fAS0fuCFQA8> (2021年1月12日)

保育の心理学 I の授業における 遠隔授業の取り組みについて

森定美也子・保育科

【科目名】

保育の心理学 I

【授業概要】

乳幼児を理解するための「人間関係の成り立ち」について発達を追って捉え、人生の各段階の課題を理解し、共感的理解の基礎について把握する。また、子どもの発達について正しく理解し、実際の保育現場でよく見られる子どもの状態やその具体的な対応策について修得する。

【科目の到達目標】

子どもの発達について理解し、保育場面での支援方法を学ぶ。保育士として乳幼児の発達に必要な知識を身につけることを目標とする。

【実践した内容】

遠隔授業では子どもの発達にかかわる DVD などの視聴覚教材が使えないが、WEB 上で DVD の内容に相当する動画を探して、学生たちに視聴してもらい、内容についてまとめたり、課題に沿って考えを整理してフォームを送ってもらった。2年のゼミの移行対象についての調査も、フォームを用いて行った。

【成果と評価】

授業評価では、「対面授業よりも遠隔の方が質問しやすい」「発達のポイントをつかむことができた」、また、「保育現場で生かすことができそうだ」という意見が多かった。フォームで送られた学生の意見や質問に対して、すぐに返事を返すことができるという点は、対面授業よりも優れている点と言える。

フォームを用いての調査は、結果がエクセルにすぐに反映されるため、紙の調査用紙からエクセルに入力する手間が省け、かつ正確であるので、2年のゼミ生が調査結果を迅速にまとめることができた。

【今後の課題と改善計画】

実習先でわずか2日感染者と接点があっただけで、保健所の指示のもと3週間自宅待機になった学生もいる。万が一本学でコロナの感染者が出た場合、保健所の指示で数週間自宅待機になる可能性は十分ある。そのような時に、すぐにオンライン授業に切り替えられるように準備をしておくことは、今後の課題として重要であろう。また、改善点として、学生をグループ分けし、学生同士の意見交換をチャットのような形で行い、それを全体に反映させるなどのグループ学習の手法を遠隔授業で行うことができれば、より授業の内容を深く理解できるであろう。

【参考文献】

黒澤礼子 2009 「0歳～3歳まで 赤ちゃんの発達障害に気づいて・育てる完全ガイド」 講談社
黒澤礼子 2009 「4歳～就学まで 幼児期の発達障害に気づいて・育てる完全ガイド」 講談社

保育内容総論の授業における 遠隔授業の取り組みについて

渡辺 直人 保育科

【科目名】

保育内容総論

【授業概要】

保育内容の5領域のみならず、歴史、保育者の役割、海外の保育など、保育に関する総じた知識の修得を目指した。幼児教育に関する基礎理論および実践例等を包括的に学び、実施形態に関しては話し合い活動やグループ活動を通して能動的な学習を多く取り入れて進めていった。

【科目の到達目標】

保育内容に関する基礎的な知識を習得し、保育内容それぞれに関する具体的活動を考案する力を身につける。また、子どもを理解するための発達課題や基礎的知識を習得し、保育の活動に関して意欲的に考える姿勢を身につけることを、本科目の目標とした。

【実践した内容】

本年度は遠隔・対面授業を交互で行ったため、取り組み方に関しては抜本的な見直し及び工夫を要した。遠隔授業では事例検討を中心に取り組んだ。教科書に記載されている事例などを中心に取り扱い、心理学的視点から子どもの内面の解説を行った。本授業で取り扱った事例及び解説の一例を以下に示す。

エピソード

園庭で、A児、B児など数人の5歳児が集まって、「あぶくたつた」で遊んでいます。そこに4歳児のC児と一緒に加わりたくて見えています。なかなか「入れて」と声をかけられずにいました。5歳児のA児が「一緒にやる？」と声をかけると4歳児のC児たちは「うん、やる」と言って遊びに加わり、C児がオニになることに決まりました。

しかし、C児が「ようわからんかもしれんよ」と言っています。

そこで、A児が「えーとな、こうやってな、回りながらあぶくたつた、にえたつた、と歌ってな・・・」と実演つき

で説明をしています。それでも C 児は「？」と頭をひねっています。A 児と B 児は必死になって「えとな、こうやってな、あぶくたった・・・って歌うんや。そしてな・・・」と C 児の顔をのぞき込んで、何度も説明をしています。不安そうな C 児を見て A 児が「わかった？はじめは一緒にオニになったろか？」と言うと C 児はにっこり笑ってうなずき、遊びが始まりました。

(栗岡ら(2019)より)

この事例に関して「A 児の機転により、物事がスムーズに進むことができましたが、A 児はどういう子どもだと想像できますか？自由に書いてみましょう。」と設問を設け、自由回答を行わせた。そしてこの事例においては、以下のように解説を行った。

・皆さんの回答にもあった通り、確かにこのような思いやりがあり、責任を引き受けるような行動はお兄さんらしくカッコいい、長男で主体性を大切にされている家庭で育っている「優秀な子」と想像しちゃいますね。ただ、別に悪いことではありません。全ての人とは言いませんが、多くの人が共通して想像することかと思います。

ただ、気をつけなければならないポイントもあります。このような先入観・固定観念（バイアス）は「偏向な対応」を生みます。ハロー効果（光背効果）、ピグマリオン効果（教師の期待効果）という心理学用語があります。

ハロー効果は、「その子どもが、何か好ましい特徴があったら、他の点も好ましいと誤解してしまう現象」のことを指します。例えば部活で優秀な成績をおさめていたら、どのようなスポーツでも万能にできるだろう、とか、親が優秀であればこの子も優秀だ、というような感じです。

ピグマリオン効果は「自分の期待した子どもの成績が伸びる現象」のことを指します。理論的にはこのように言われています。

(中略)

このように、印象は無意識のうちに「偏向な対応」を生むことが言われています。もちろん人間なので印象を持つな、と言われても知らず知らずになってしまうものです。ただし、教育・保育に携わるものとして、日頃から「対応は平等か」考えることが求められるでしょう。

以上のように、科学的・理論的に解説を行った。以上は一例であるが、他のコマでも同様に科学的・理論的に解説を行っている。また、上記と同様にどの設問に関しても、必ず問いに関しては解説等のフィードバックを付した。

その他、学生の答案・コメントもすべて概観した。その中でも、学生にとって有益な参考になりうるコメントは、他の学生に共有もした。

【成果と評価】

成果と評価に関して、本授業とその遠隔授業に対して学生自身がどのように考えているか、アンケート調査を行った。以下、方法とその分析結果を示す。

1. 方法

本授業のオンラインでの遠隔授業に関して、学生にアンケート調査を行った。

(1) 調査対象者

本学1年生72名。有効回答数は63件であった。

(2) 調査日・場所

2020年12月16日、Google Formを用い、オンライン上で回収した。

(3) 調査の手続き

質問紙調査法を行った。リッカート尺度の5件法で尋ねた。小さい数ほど「そう思わない」、大きい数ほど「そう思う」を選択する方式を採った。

(4) 質問内容・分析方法

- ① 「遠隔授業はあまり好きではない」
- ② 「遠隔授業は楽しく受講することができる」
- ③ 「この授業の「遠隔授業の方法」に満足している」

この3問をFriedman検定、及び多重比較を用い分析した。なお、分析にはShimizu(2006)のプログラムを使用した。

2. 結果

本学の学生72名(有効回答数63名)に対し、遠隔授業に対する考えを調査した。まず、その要約統計量を以下に示す(表1)。

表1 要約統計量

変数名	<i>N</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	Min.	Max.
① 遠隔授業はあまり好きではない	63	2.032	1.047	1.000	5.000
② 遠隔授業は楽しく受講することができる	63	3.952	0.941	2.000	5.000
③ この授業の「遠隔授業の方法」に満足している	63	3.889	1.002	1.000	5.000

注)回答方法は5件法で行った。

次に、Friedman 検定を行った。結果、上記の3組で有意差が確認された($\chi^2(52.25), df=2, p<.01$)。この結果から、この3群間には差があることが確認された。

また、各群間の差を確認するため多重比較を行った。その結果、①と②、①と③との間で有意な差が確認された(表2)。

表2 多重比較の結果

水準の組	順位の差	効果量 <i>r</i>	95%CI	Z値	<i>p</i> 値
(1) ①遠隔授業はあまり好きではない - ②遠隔授業は楽しく受講することができる	-1.008	-.504	-.623, -.363	-5.657	.000
(2) ①遠隔授業はあまり好きではない - ③この授業の「遠隔授業の方法」に満足している	-0.968	-.484	-.606, -.340	-5.434	.000
(3) ②遠隔授業は楽しく受講することができる - ③この授業の「遠隔授業の方法」に満足している	0.040	.020	-.154, .1 92	0.223	.824

注)多重比較はHolm法で行った。

以上、[①「遠隔授業はあまり好きではない」 - ②「遠隔授業は楽しく受講することができる」]および[①「遠隔授業はあまり好きではない」 - ③「この授業の「遠隔授業」の方法に満足している」]の間で有意な差が確認された。この結果からも、本授業の方法についても肯定的な評価が得られたことが示唆されたといえよう。

また、(3)[②「遠隔授業は楽しく受講することができる」 - ③「この授業の「遠隔授業」の方法に満足している」]の比較では有意差が確認されなかった。95%信頼区間においても妥当な結果が得られていないことから、本調査は内的一貫性を得られた結果となった。

【今後の課題と改善計画】

オンラインでの遠隔授業は、「録画された動画を視聴する方法」、「課題を提示し、回答させる方法」、「ズームなどを用い、映像を通してリアルタイムで授業を行う方法」等がある。本授業の遠隔授業では「課題を提示し、回答させる方法」を中心に組み組んだが、他の方法では異なる結果が得られることも考えられる。今後は、他の方法も同様に効果を検討していきたい。

また、Cronbach が提唱した適正処遇交互作用理論(ATI)(並木, 1993)にもある通り、学習の効果は教授法と学習者の適正の交互作用であるといわれている。そのため、方法を一つに固定化するのではなく、上述した複数の方法を複合的に取り入れて授業を行っていくことも重要であると考えられる。

【参考文献】

Shimizu, H. (2016). An introduction to the statistical free software HAD: Suggestions to improve teaching, learning and practice data analysis. *Journal of Media, Information and Communication*, 1, 59-73

栗岡あけみ・位田かづ代・宿南久美子・和田真由美(2019)『保育内容総論』豊岡短大通信教育部

並木博(1993). ATI 研究の 20 年—教育心理学への開眼. 慶応義塾大学大学院社会学研究科紀要 (36), p75-80

和歌山信愛女子短期大学
自己点検・評価報告書
FD 実践報告書

生活文化学科
生活文化専攻

消費生活論」の授業における遠隔授業の取り組みについて

浅田 真理子・生活文化専攻

【科目名】

消費生活異論

【授業概要】

豊かで便利な消費生活がどのように成り立っているのか、またその中に潜むさまざまな問題を知り、消費者の権利と責任について理解する。大学生や若い女性に関わるケースなどを取り上げ、身近な問題として理解しながら、より良い社会の実現に向けて行動するための知識を学ぶ授業である。

【科目の到達目標】

- ・社会が抱える消費問題を知り、地域に貢献できる人材となる
- ・消費生活に関わる幅広い知識を習得できる
- ・社会生活のトラブルを避け、安全に暮らすための思考と判断力を養う
- ・社会人として、より良い消費社会実現に向けて行動するための態度や志向が身に付く

【実践した内容】

本授業は、生活文化学科生活文化専攻（以下、「本専攻」とする）2年生後期の選択科目である。卒業を控え、社会生活を目前にする中で、身近な問題として関心を持つようなケース取り上げながら説明を行うことを心がけ、すべての回数を遠隔で実施した。Google Classroomのコメントでの進行をメインとし、meet機能は利用していない。学生が事前に準備するものは、指定したテキストである。

1. 授業準備と進行の工夫

遠隔授業では、全般的にメリハリのある進行が必要であると考えているが、毎回違う進行や、飽きさせず楽しませるようとするあまり、凝った工夫をし過ぎるとかえって学生が混乱したり、使用ツールにより反応にばらつきが出るのが前期実施した別の科目の進行を通して感じられた。

そこで、この授業では、基本的にテキストの項目ごとにシラバスに添って毎回テーマを決めて学ぶことから、ある程度一定の進め方で行い、学生が安心して受講できるよう心掛けた。

また、テキストの補足として紹介する資料や動画は、事前予習や出席フォーム提出後の待ち時間などに確認できるよう、授業開始前にアップしておいた。これは、学生側の電波の良し悪しや容量の問題などはもちろん、教員側の万一のトラブルで「ファイルがアップできない」「資料が開けない」という事態をできる限り避けるためである。

2. 基本的な授業進行

- (1) フォームによる出席確認 (10分)

↓

(2) 前回取り上げたテーマの振り返りと、前回の授業後、報道された関連するニュースの紹介など (5分)



(3) 本日のテーマの概要説明とテキストの関連ページの紹介を行い、目を通すよう指示 (10分)



(4) コメント欄から関連のニュースや教員の体験談紹介、学生への投げかけなどで双方向を心がけながらやり取りを行う (10分)



(5) 関連する動画や資料を閲覧、確認 (10~20分)



(6) 動画や資料に関連する説明の補足や意見などの問いかけ、場合により限定公開コメントでやり取り (10分)



(7) テキストのまとめ部分の確認 (10分)



(8) 本日のまとめ課題または、理解度チェックテスト (15分)



(9) 課題に対する講評、解答解説、補足説明、次回のテーマ説明 (10分)

【成果と評価】

授業評価アンケートの結果は以下の通りであり、すべての項目で本専攻平均と全体平均を上回った。遠隔授業への切り替えが必要になったが、1.「授業の計画につて」及びIV.「授業の成果について」の評価が低くないことから、科目の到達目標は達成したと考える

- I. 授業の計画について 4.73
- II. 授業の内容について 4.75
- III. 教員の教え方について 4.76
- IV. 授業の成果について 4.66

【今後の課題と改善計画】

教室で質問投げかけや意見を求めた場合には、リアクションが得られないことが多いが、遠隔授業で毎回、自分の考えをまとめる課題を行ったところ、驚くほどしっかりした考察をする学生が多く、こちらが予想するより熱心に受講している様子が窺えた。ただし、幾つかの課題と改善が必要であると思われる点があり、対面授業も含め、今後の効果的な授業運営に活用していきたい。課題とそれに対する改善案は、下記のとおりである。

- ・授業前に課題を上げておくため、指示する前に提出する学生が見受けられた (授業内で指示に沿って提出するよう記載している)。指示の記載と受講ルールをコメント欄を活用し、さらに明確に示す
- ・タイムラグを考えたコメント欄記入のペース配分を行う
- ・課題指示や資料ファイルを開く時間とコメント欄に戻る指示を明確にする工夫が必要である (ファイルを開くと時間を忘れて取り残される学生がいた)。ファイルに時間指定を書き込むなど、学生が気づくようにする
- ・meet 機能を学生のプライバシーや状況に配慮しながら活用することにより、双方向の精度の向上に取り組む

情報コミュニケーション論の授業における 遠隔授業の取り組みについて

伊藤 宏・生活文化学科生活文化専攻

【科目名】

情報コミュニケーション論

【授業概要】

高度情報化社会において、コミュニケーションは生きていく上で欠かせないスキルとなっている。この講義では様々なコミュニケーションの場面を想定し、その基本的な考え方について理解し、それを自己理解や対人関係に生かせるようなスキルを身につける。あわせて、人に情報を伝えるためのプレゼンテーション能力を高めるためのスキルについても考える。

【科目の到達目標】

コミュニケーションについての様々な理論を理解できる。また、コミュニケーション・スキルを人間関係の様々な場面で活用できる。さらに、プレゼンテーションの本質を理解したうえで実際に効果的なプレゼンテーションを行うことができる。

【実践した内容】

Google の Classroom を用いて、全 14 回の授業を遠隔で実施した。前期の講義科目については、予め講義内容を録画したものを Youtube にアップしておき、授業時間内に学生がそれを視聴するオンデマンド形式で行ったが、学生とリアルタイムのやり取りができなかったため、後期は Meet を利用することとした。

授業開始時には、Classroom の「手順」で学生に指示を出した。まず「出席確認シート」を記入・提出させ、続いて参加コードを示して Meet への参加を促した。開講当初は、これらを授業開始時刻に行っていたが、一連の手順を踏んだ上で出席学生全てが Meet に参加するまで最大 10 分近い時間がかかってしまった。そこで、予め「出席確認シート」を Classroom にアップし、Meet の参加コードも含めて授業開始前から学生に「手順」で通知する形を取った。これにより、授業開始時刻から数分で学生が揃い、講義を始めることができた。「出席確認シート」は、授業終了時刻まではアクセスを可とした。提出時刻が表示されるため、遅刻した学生の判別が可能だったからである。授業終了と同時に「受付終了」とした。また、学生には Meet に参加する際、カメラおよびマイクはオフにするように指示を出し、発言する場合にはマイクをオンにするように呼びかけた。

授業は主に PowerPoint で作成した教材を用いて行った。まず、前回講義の内容の振り返った上で、当日の講義の概要をビデオを通して学生に説明した。続いて、「画面を共有」機能により PowerPoint の画面に切り替え、以後はスライドに基づき解説をしていった。一定程度まとまった内容を解説した後、学生に質問を促す時間を可能な限り設けるように心がけた。

授業終了時刻の 10 分前ぐらいに PowerPoint を利用した講義を終了し、学生には Classroom に戻るように指示を出した。全員が Meet から退出したことを確認した上で、「退室時アンケート」をアップした。「退室時アンケート」は、授業で印象に残ったこと、授業全般の感想、授業中にできなかった質問などを小テスト形式で記入する内容にし

ておいた。学生が記入している間に、その日の授業内容をまとめた「講義ノート」をPDFファイル形式でClassroomにアップし、学生には復習用として活用するように促した。また、に学生から「メモが追いつかないので、授業で用いたスライドを再度見たい」という要望があったため、途中からPowerPointのデータをPDFファイルに変換して「講義ノート」と共に提供するようにした。

【成果と評価】

授業評価アンケート結果を見ると、全ての項目について概ね4.0以上の評価を得られたが、「授業の内容について」は「この授業は興味や関心が持てた」「この授業は自分のためになる内容だった」「授業の目標が分かりやすく示されていた」のいずれの項目も、他に比べて若干低めとなっていた。学生自身の興味・関心や授業に向かう姿勢の違いが原因として考えられるが、やはり遠隔授業の限界が強く影響したものと思われる。

特に講義形式の授業は、学生の反応を見ながら話題を選んだり、変えたりしつつ進めていくことが非常に重要となる。対面であれば、リアルタイムで学生の反応を見ることができるので、説明したことが理解できていないような怪訝な表情を浮かべた学生、あきらかにつまらなそうにしている学生などを即座に把握し、それに応じた働きかけをしながら授業を進められる。しかし、学生の反応がほとんど分からない遠隔授業においては、どうしても教える側の一方通行に陥らざるを得ない。授業を熱心に聞いている学生がいる一方で、そうでない学生については全くフォローができなかったことが悔やまれる。

また、要所要所で学生に質問の機会を与えたが、その場で発言する学生はほぼ皆無であった。「退室時アンケート」や「限定コメント」を通じて質問してきた学生が数名あったが、それに対して返答するまでにどうしてもタイムラグが生じてしまう。内容によっては、「限定コメント」を通じて個別に回答し、コメントの文字情報だけではなかなか回答できない質問については、全体で共有するという意味も含めて次の授業で質問を紹介、回答するという形を取ったが、それでも学生の疑問や不明点についてきちんと応えられたかどうかの自信はない。

さらに、遠隔授業中に全ての学生が授業を受けていたかどうかについても疑問が残る。出席確認シートの提出をしてMeetに参加した後、学生がどのような行動を取っているか（席を外したり、他の作業をしたりしていないか）を確認する術がない。たえずコメントを求めたり、何かしらの作業をさせることが可能ならば、そのようなことは起こり得ないかもしれないが、講義形式の授業ではそれがなかなかできないのが現状である。

【今後の課題と改善計画】

今年度は、手探りで遠隔授業を実施したため、基本的に対面授業の内容をClassroomなどを利用して行うという形になってしまった。また、100分間の中に学生が主体的に関わる時間帯を設ける工夫も足りなかった。こうした反省に立って、次年度以降に講義科目を遠隔で実施する場合には、独自の教材、授業進行等を準備する必要があるだろう。

また、この授業に限らず、今年度の遠隔授業実施によって本学のICT環境の脆弱さが改めて露呈した。特に、教員が本学内の教室や研究室において授業を実施する場合、通信環境の不安定さは致命的になってしまう。巨額の予算が必要なため、一朝一夕の改善は困難であろうが、通常の授業においても今後はICT環境の整備が必須となってくるはずだ。本学の中長期計画において、その実現に向けた施策を掲げていくことが重要であろう。

以上

情報処理論の授業における 遠隔授業の取り組みについて

生活文化学科 生活文化専攻

中西 淳平

【科目名】

情報処理論（生活文化学科 生活文化専攻、前期）

【授業概要】

我々が日常的に利用しているコンピュータを構成している装置・周辺機器とその動作原理を学ぶ。また、情報の収集と活用、情報機器の安全な取り扱い、ソフトウェアの種類と役割について学ぶ。

【科目の到達目標】

コンピュータを活用することでどのようなことが可能になるのかを理解する。コンピュータの利点と欠点、情報機器の安全な取り扱い、インターネットの光と影など、情報を活用するために求められる基礎的な知識と技術を身に付ける。

【実践した内容】

主な授業内容は、コンピュータを構成している装置・周辺機器の種類と名前、役割とそれらの動作原理を学習する内容であり、基本事項の知識獲得が主たる目的となる。教科書は特に指定せず、プリントを配付して授業を進めていく。例年ならば、授業プリントを配付し、その内容のうち重要なポイントをピックアップして説明し、必要があれば詳細解説や周辺知識の紹介・披露等を行い、より深く理解が進むよう学生の様子を見ながら授業を進めていく。

しかし、今年は新型コロナウイルス感染拡大防止対策のため、対面授業ではなく遠隔授業で授業を進めることとなった。授業をサポートするツールとしてGoogle Classroomを用い、これによってプリント配付、閲覧、重要ポイントの説明および詳細解説を実施した。重要ポイントの説明および詳細解説においては、Google Classroomに備わっている授業参加者全員に全体コメントをリアルタイムに送付する機能を利用することによって、対面授業と同様のライブ感を学生に感じられるよう配慮した。また、学生の理解の助けとなるよう、授業のところどころで学生が自身の知識獲得を確認できる確認テストを実施し、これの実施にはGoogle Formsを活用した。確認テストの正答率に応じて、必要があれば授業内容を再度解説したり、確認テストを複数回実施したりした。

【成果と評価】

授業評価アンケート結果を下の表に示す。「Ⅰ. 授業の計画について」について、科目平均は、生活文化平均と全体平均と比べて、同じかやや高い値を示した。一方、「Ⅱ. 授業の内容について」「Ⅲ. 教員の教え方について」「Ⅳ. 授業の成果について」の3つについてはいずれも、科目平均は生活文化平均、全体平均よりも低い値を示した。この結果から即座にわかることは、今年の遠隔授業はうまくいかなかった、ということである。

授業評価アンケートをさらに詳細に見ていくと、「Ⅰ. 授業の計画について」の設問のうち、「急な休講や補講、教員の遅刻や早退などは無かった」と「授業の開始時間や終了時間は守られていた」は科目平均がそれぞれ4.70、4.73であった。生活文化平均がそれぞれ4.68、4.66で、全体平均がそれぞれ4.59、4.57であることと比較すると、これらの設問項目では特に高い評価が得られたと言えよう。

一方、「Ⅱ. 授業の内容について」の設問のうち一番低い評価を受けたのは「この授業は興味や関心が持てた」である。「Ⅲ. 教員の教え方について」の設問のうち一番低い評価を受けたのは「教員の言葉は、聞き取りやすかった」である。「Ⅳ. 授業の成果について」の設問のうち一番低い評価を受けたのは「私はこの授業に意欲的に取り組んだ」である。知識獲得を主たる目的とする暗記科目であるため、興味・関心・意欲が持てるかどうかは授業内容と学生との相性によるところもあるが、それを考慮しても低い評価となった。授業プリント配付、コメントによる解説といった進め方で遠隔授業を実施したため、音声による授業はなかったため、聞き取りやすいはテキスト・解説が読みやすいと解釈するのが適当と思われ、そのように解釈しても低い評価となった。

表：授業評価アンケートの結果

	科目平均	生活文化平均	全体平均
Ⅰ. 授業の計画について	4.61	4.61	4.52
Ⅱ. 授業の内容について	3.79	4.34	4.37
Ⅲ. 教員の教え方について	4.03	4.41	4.37
Ⅳ. 授業の成果について	3.98	4.44	4.44

【今後の課題と改善計画】

知識獲得を主たる目的とする暗記科目であるため、もともと高い評価を得にくい授業ではあるが、対面授業ではなく遠隔授業として実施したことによって、例年以上に低い評価となった。対面授業における板書ならば、解説の進行に合わせて消したり書き足したりが可能であるし、身振り手振りを組み合わせて解説することもできる。ちょっとしたことなら小道具を用意して、理解を促すこともできる。しかし、遠隔授業においては、学生の活動は資料の提示・読解であり、さらに読解を手助けするためのこちらが実施した全体コメントによる解説も、学生から見れば画面に表示されたテキストの読解である。今回の遠隔授業における課題は授業がテキスト読解に偏りすぎた事であり、不足部分は教員からのテキスト読解以外の手段による授業内容伝達がなかったことである。例年の授業で行っていた板書や小道具を用いた解説等を撮影し、動画配信による解説があると、学生の理解が進み、評価も高まるものと考えられる。

家政学概論における、 遠隔授業の取り組みについて

東口依未・生活文化学科生活文化専攻

【科目名】

家政学概論

【授業概要】

私たちは普段、無意識の中で衣、食、住の生活を送っている。その衣食住を家政学の分野としてとらえ、基礎的知識を概観し、理解する。また、これからの自立した生活を過ごせるよう、知識と技術を学ぶ。

【科目の到達目標】

- ◎ 技能・表現 自分らしい生活が送れるような生活力が身についている
- 知識・理解 衣食住の基礎的な知識を習得する
- △ 知識・理解 衣食住の問題について理解し、改善方法を身につける
- △ 態度・志向 衣食住の生活において、意欲的に考える姿勢が身についている

【実践した内容】

私たちの生活は、服を着る、洗濯する、衣服の補修をするといった衣生活や献立をつくる、調理をする、食事をするといった食生活、快適性や安全性を考えて住むといった住生活のように、衣食住を中心として行われている。衣食住の生活は主に家庭で行われているものであるが、家庭それぞれに考え方や取り組み方などに違いがあるため、同じ生活行動であっても全く同じにはならない。しかし、いかなる人も健康で快適な豊かな生活を望んでいるという点は同じである。生活文化専攻は、ビジネス社会や家庭において自分らしいライフデザイン力を身につけることを目指している。そこで、本学における家政学概論は家庭におけるライフデザイン力の習得を目指し、自分らしい生活力の習得、生活を豊かでよりよいものにできる知識の習得、また生活の中での問題や課題について考えられる力を養うことをねらいとしている。本授業では遠隔授業のツールとして、グーグルクラスルーム内のクラスコメントとドキュメントフォーム、エクセルフォーム、PDF ファイル、グーグルフォームを用いて授業を行った。授業を進める、語彙の説明する、課題の指示には主にクラスコメントを使い、クラスコメントでは説明の難しいものについてはPDF ファイルを用いた。PDF ファイルは対面授業での口頭説明と同等になるように文章と資料をまとめたものを作成した。クラスコメントで授業を進め、詳しい内容をPDF ファイルで確認するという方法を用いて授業を行った。授業の最後には毎回、知識の定着のため選択問題や記述課題を与え回答を求めた。課題は、学生自身が回答後に正誤がわかるように設定した。授業の中で、必要に応じて学生同士の意見共有のツールとして、ドキュメントファイルやエクセルフォームを用い、各自が入力し閲覧できるようにした。(図1) また、遠隔授業とのためインターネット環境が整っているという所から、インターネット上で配信されている映像を各自で視聴する方法も取り入れた。

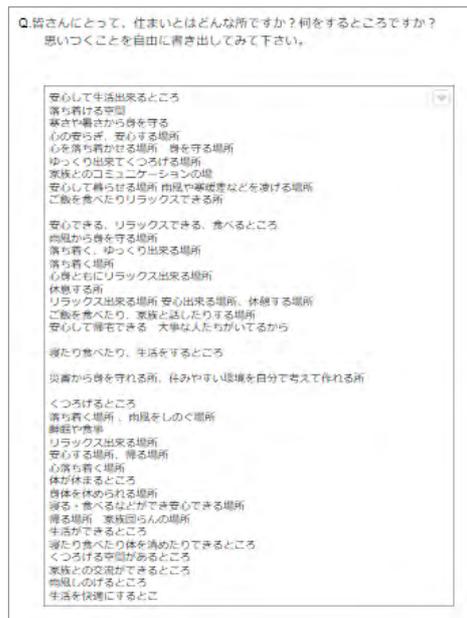


図 1

【成果と評価】

授業評価結果は5段階評価のうち、Ⅰの授業の計画については4.70、Ⅱの授業内容については3.94、Ⅲの教員の教え方については4.11、Ⅳ授業の成果については4.15という結果であった。全体平均、生活文化専攻平均と比較すると、Ⅰについては高評価であったが、それ以外の項目では下回る結果となった。特に、Ⅱの項目では評価が低かった。その中でも「この授業は興味や関心が持てた」という質問についての評価が低かった。生活力と知識習得を目的として、文章での説明や資料の提示が多くなったことにより、情報量が多くなったことが学生の負担となり、興味や関心に影響してしまったのではないだろうか。学生からのコメントでも、映像視聴が理解の助けになったといった意見もあり、文章や資料に偏ったことが要因ではないかと考える。しかし、Ⅳの授業成果での項目にある「この授業を通して、新しい知識、技術、能力が身についた」の結果は4.24だった。4は「そう思う」の項目であるため、結果が4以上であることから科目の到達目標である、自分らしい生活を送れるような知識や技術の習得を達成し、生活力が身についたと考えられる。コメントと説明資料の提示という授業展開だけでなく、別の教授方法を検討し取り入れることが必要となることが分かった。

【今後の課題と改善計画】

遠隔授業で使用できるツールを習得し活用していくこと、それらのツールを授業の中でどのように活用するのかを十分に検討し、計画することが課題といえる。コメントと説明資料を提示するツールだけでは、学生への負担が多くなってしまう。そのため、学生への負担を考慮したコメント量や資料の検討と共に、別のツールでの教授法を検討していかなければならない。また、映像視聴がわかりやすかったとの意見があることから、資料としての動画だけでなく、学生と教員をつなぐ映像ツールの使用も知識理解の促進と共に、学生の表情や動きを知る材料になりえる。遠隔授業では対面授業とは違い、コメントやフォームといったツールの使用によって学生が意見を発言しやすい状況となっているとの意見がFD研修会でもあった。遠隔授業を行っていくにあたり、コメントや説明資料の提示ツール、映像ツール、フォームといった様々なツールを駆使することが求められ、取り入れていくことが必要と考える。

【参考文献】

東城敏幸『新編生活科学<第2版>』株式会社東京教学社 2018年

遠隔授業におけるグループワーク

山本桂子・生活文化学科生活文化専攻

【科目名】

人間関係論

【授業概要】

毎日の学校や職場、地域など、生活のあらゆる場面で人間関係を良好にするためにどのようなことができるのか、コミュニケーションの技法をレクチャーするとともに、ワークシートを使用した学習の場を提供する。

【科目の到達目標】

- ・聞く力、話す力を駆使し他者と円滑なコミュニケーションがとれる
- ・聞く力、話す力、人間力に関する知識が身についている
- ・他者の立場に立ち相互理解を深めようとすることができる
- ・積極的に他者と関わる姿勢が身についている

【実践した内容】

神奈川県青少年指導者養成協議会が無償で配布している「楽しくすすめるグループワーク～個と集団の気づきをうながす～」の中から「民宿の部屋」と題されたグループワークを、グーグルクラスルームを使用した遠隔授業で取り入れた。対面で6～7人のグループに分かれて取り組んでもらい、チームで問題を解く速さや正確さを競い合いチーム力を高める、というのが本来の使い方であるが、遠隔でお互いのコミュニケーションが難しいこともあり、グループに分かれるのはやめ、出席者全員で協力しあって一つの問題に取り組んでもらうこととした。出席者は14名であった。

問題の内容は、民宿に泊まる20人の部屋割りをヒントから推測するというものである。ヒントは16あり、その全てが揃うと20人の部屋割りを確定させることが可能である。遠隔授業で使用したものは、「民宿の部屋 課題用紙 (PDF)」、「情報交換の場 (ドキュメントシート)」、「民宿の部屋 回答用紙 (ドキュメントシート)」、「民宿の部屋 正解と解説 (PDF)」で、ドキュメントシートはみんなで編集ができる状態にした。まず教員が「民宿の部屋 課題用紙」で出題、学生がそれを読んでいる間に教員が限定公開コメントで一人ずつにヒントを送り、ヒントを受け取った学生がそのヒントを「情報交換の場」で共有、それら共有されたヒントを見ながら考えられることを「情報交換の場」で話し合いながら、「民宿の部屋 回答用紙」に記入し、回答ができた時点で教員が「民宿の部屋 正解と解説」で解説するという流れである。

学生はヒントの数と、ヒント全てが揃わなければ答えを導き出せないことを知っており、自分が受け取ったヒントを番号付きで「情報交換の場」に書き込み始めた。ある程度ヒントが出てきた時点で、「○番のヒントから、Aさんは○○の部屋」などと、それぞれが気付いたことを書き込みはじめ、少しずつ部屋が確定された。謎解きの要素があり、ヒントを並べるだけでは簡単には解くことができないので、回答が揃うまでは40分～50分くらいはかかるのではと想定していたが、学生は約30分で回答し終えた。こちらが考えていた以上に情報の伝え方が論理的であり、スピーディであった。

【成果と評価】

終了後に学生に、自分として「良かった点」「反省点」について書いてもらったところ、「良かった点」では「素早くヒントを書き込んだ。」「積極的に意見が出せたと思う。」「ヒントから答えを導き出す、情報共有をうまくできたと思う。」などの声があった。反省点としては「ヒントを書くのに順番を無視してしまったこと。情報共有場所に簡潔に書くのではなく、いらぬ文を付けてしまったこと。〇〇から〇〇が〇〇である 〇〇から『〇〇だから』〇〇が〇〇である 『』←が不要だった。」「一生懸命考えたが全く分からずみんなと意見交換できなかった。」「もっと早くに自分の意見を言うべきだったなと思いました。」などの声があった。

こちらが想定した以上にそれぞれが考え、行動し、行動できなかったことに対して反省がなされていた。お互いの顔が見えないという状況の中で、完璧に合っているという自信がないことを書き込むには勇気がいることだったと思われるが、14名の参加者の中で4、5名は意見を書き込み、それができなかった者も回答用紙に書き込むなどしており、傍観していた者はいなかった印象である。

対面での使用が想定された教材を遠隔授業で使用するにあたり、ヒントの伝え方や情報共有の仕方など工夫が必要であったが、学生は双方向の参加型授業に参加できたという高揚感を持ってくれたようである。また、ワークの目的である、チームワークについては、積極的に参加できた者とそうでなかった者がいたが、参加できなかった者は「自信がなかった。」「謎解きが苦手だった。」という理由に分かれていたと思われる。全体としては、協力し合っって問題を解こうとする姿勢が見られ、チームで何かを成し遂げる疑似体験ができたのではと考える。

【今後の課題と改善計画】

実践後の課題として、今回は文字だけのやり取りであったため、参加型であってもコミュニケーションが取りにくい面は否めなかった。ZOOMのブレイクアウト機能を使用し、より対面に近い状態での実施ができれば学生がお互いの顔を見て発言しやすく、また違った結果になったかもしれないが、そこまでの準備を整えることができなかった。

コロナ禍で急速に進めた遠隔授業であったため、教員側、学生側とも環境、スキル面で足並みが揃わなかったことで難しさを感じたが、工夫次第で遠隔授業でも対面以上の学習効果があることも、可能性として感じた。

【参考文献】

「楽しくすすめるグループワーク～個と集団の気づきをうながす～」神奈川県青少年指導者養成協議会
<https://www.pref.kanagawa.jp/docs/ch3/cnt/f531226/p449701.html>

栄養学概論の遠隔授業

井上和彦・生活文化学科 食物栄養専攻

【科目名】

栄養学概論（食物栄養専攻1年生対象）

【授業概要】

五大栄養素（炭水化物（糖質）、脂質、たんぱく質、ビタミン、ミネラル（無機質））の種類と性質、体内で消化・吸収される仕組み、水・電解質やエネルギーの代謝を学ぶ。

【科目の到達目標】

- 栄養素の種類、機能、消化・吸収の仕組み、体内動態の基礎的な知識を習得する。
- 栄養素の欠乏や過剰が生体に及ぼす影響について、考察することができる。

【実践した内容】

Google Classroom を用いて、遠隔授業を実施した。その際、次の2つを作成し、学生に提示した。

① 授業内容を要約した資料

授業開始前に、右に示すような授業内容を要約した資料をアップロードし、学生にあらかじめ閲覧するよう指示した。授業中は、コメントでこの資料を解説し、必要に応じてテキストの図表を見るように指示した。

対面授業時もこのような資料を配布していたが、重要なキーワードは赤欄にし、学生に適宜書き込むよう指示していた。遠隔授業ではそれができないため、重要なキーワードは赤字で表示し、目立つようにした。それ以外にも、資料の記述内容と連動するテキストの図表を見つけやすくするため、資料中にテキストのページ数と図表の番号を明記した。

なお、用いた資料は印刷して、次回の対面授業時に配布した。この時、遠隔授業のコメントでは解説が不十分な箇所について、改めて口頭で解説し、学生の理解を深められるよう工夫した。

② 確認テスト

Google フォームを利用した確認テストを毎回の授業後半で実施した。確認テストは4択もしくは5択とし、学生は自分の解答を送信した後に、正誤がわかるよう設定した。

栄養学概論（第3回）

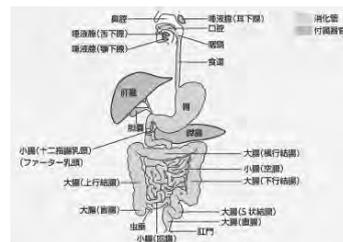
① 消化器系の構造と機能

A. 口腔・咽頭・食道・胃・小腸・大腸の基本構造と機能

- ・ 消化器：食べたものを消化、吸収、排泄、代謝、貯留する器官群
- ・ 消化管：口から肛門までの食物の通り道

✍ 消化管は自律神経や消化管ホルモンによって調節されている。

✍ 蠕動（ぜんどう）運動により、食塊を運ぶ。（p.41 図4）



- 1) 口腔
 - ・ 食物は口腔内で咀嚼（そしゃく）される。
 - ・ 主に、糖質が消化される。
- 2) 咽頭
 - ・ 嚥下（えんげ）：口腔内の食塊を咽頭、食道を経て胃に送り込む過程
 - ➡ 嚥下障害：食べ物を上手に飲み込めない状態口
- 3) 食道
 - ・ 咽頭と胃をつなぐ管
 - ・ 蠕動運動により、食塊を胃に運ぶ。
- 4) 胃
 - ・ 胃の出口の括約筋が閉じたまま、蠕動運動が繰り返され、食物が消化される。口
 - ・ 主に、たんぱく質が消化される。

なお、確認テストも資料と同様に印刷して、次回の対面授業時に配布し、口頭で解説した。

【成果と評価】

授業評価アンケートでは、「教員の教え方」について、5点満点中4.80という高評価を得ることができた（回答者26名）。遠隔授業でも、対面授業のような臨場感を味わえるよう工夫したが、学生には好意的に受け入れられたと考えられる。

【今後の課題と改善計画】

今後も遠隔授業を実施する時には、基本的には今回のようなスタイルを継続していく考えである。なお、資料はモノクロで印刷することを前提にしていたため、敢えて色使いをシンプルにしたが、見やすさを考えればもっとカラフルな方が望ましいと思われる。資料の構成については、さらに改善する必要がある。

今回、期末試験を実施しないことになり、確認テストの成績を科目の成績とした。しかしながら、本来は期末試験で学生の理解度を把握するため、確認テストだけでは学生の学習成果は評価できない。授業は終了したが、今後も授業内容を復習できるような機会を積極的に設けたいと考えている。

紀の国の自然における、 遠隔授業の取り組みについて

芝田 史仁・生活文化学科食物栄養専攻

【科目名】

紀の国の自然

【授業概要】

和歌山の風土を形作る大地と気象、生物について概説する。さらに、そこに住む人々の生活と自然との関わりについて、調査学習を通じて理解を促すとともに、地震や津波、台風などの被害にも言及し、防災意識の向上を図る。

【科目の到達目標】

- ・和歌山の風土を形成する自然の特徴と人々の生活との関わりについて理解している。
- ・地域課題を理解し、解決に向けて主体的に取り組むことができる。
- ・授業に意欲的に取り組むことが出来る。
- ・地域の一員としての自覚を持ち、地域をより良くしようとする態度を身に付けている。

【実践した内容】

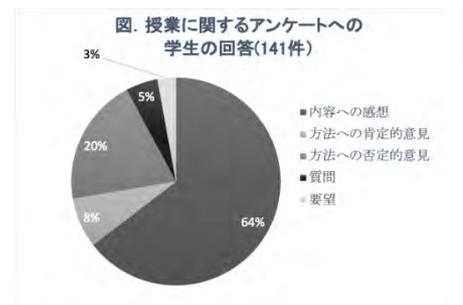
今年度は新型コロナウイルス感染症対策のため、授業計画の半分を Google Classroom を利用した遠隔授業で実施することとなった。遠隔授業は、『平成 13 年文部科学省告示第 51 号(大学設置基準第二十五条第二項の規定に基づく大学が履修させることができる授業等)』において、『同時かつ双方向で行われるもの』、もしくは、『毎回の授業の実施に当たって、当該授業を行う教員若しくは指導補助者が、設問解答、添削指導、質疑応答等による十分な指導を併せ行うものであって、かつ、当該授業に関する学生等の意見の交換の機会が確保されているもの』と定義されている。さらに、『大学等における新型コロナウイルス感染症への対応ガイドラインについて(令和 2 年 6 月 5 日文部科学省通知)』によると、『授業担当教員が、オンライン上での出席管理や確認的な課題の提出などにより、当該授業の実施状況を十分把握していること』としている。この定義とガイドラインに対応するよう、本授業では、Google フォームによる出席管理、Google Meet を使用した動画の講義(30分程度)、課題(40分程度)、フォームによるまとめ(10分程度)という方法を採用した。フォームは Google が提供するアンケートフォーム作成用サービスであり、設定により試験や演習問題などへも対応が可能である。また、Meet は同じく Google が提供するオンラインビデオ会議サービスであり、視覚と音声情報を多人数間で、リアルタイムに、同時双方向的に共有することが可能である。しかし、多くの学生がスマートフォン等の携帯電話で受講していることを考慮し、本講義では、パワーポイント画面のみを Meet を通じて学生と共有し、スライドショーを実行しながらリアルタイムで解説を行うという、一方向的な講義形式を採用した。学生の質問などには、講義配信後に、Classroom のコメント機能を利用して対応した。また、講義に使うパワーポイント資料は、PDF 書類の形で Classroom 上にアップロードしておくとともに、Meet の機能を使って講義を録画し、YouTube にアップロードすることで、授業終了後も自由に閲覧できるようにした。

Meet の講義終了後には、学生に授業時間内に行う課題を提示し、質疑応答への対応への対応も併せて行う時間を

設定した。課題の提示と回答の提出方法については、最初の2回の遠隔授業と最後のまとめの遠隔授業では、前期に行った他の授業と同様に、フォームを用いて演習問題を作成し、授業時間内での回答を求めるという方法を採用した。しかし、この方法では、授業の初めに出席のみおこなない、授業時間以外で課題を行う学生が散見された。また、採点やコメントに時間がかかり、課題へのフィードバックが遅くなってしまうことや、他の学生の回答を知りたいという学生に対しても対応が遅くなってしまうという問題があった。そこで、第6回講義の遠隔授業からは、Classroomのコメント機能を用いて課題の提示と回答、質疑応答の全てを行うという方法に変更した。提出された回答については、適宜Classroomの『限定公開コメント』機能を用いて、学生個々にフィードバックを行うった。また、授業時間内に解説時間を設け、Classroom『クラスで共有』機能を用いて、回答例や模範解答を示し、学生全体の理解を深めるように工夫した。

【成果と評価】

第2回及び第4回授業の課題設問および、第6回以降の授業のまとめシートの設問に、授業に関する質問・意見・感想などを書き込む欄を設け、延べ141件の回答を得た(図)。141件の回答の内、64%(91件)は授業内容への感想であった。回答にあった感想では、『和歌山について知らないことがたくさんあってとても驚きました』『和歌山の自然についてまた一つ学ぶことが出来た』『日高川流域について詳しく知れて良かったです』など学んだ内容について肯定的に捉えているものがほとんどであった。次に、授業の方法に関しては肯定的意見が8%(11件)、否定的な意見は20%(28件)あった。肯定的な意見では、『わかりやすかったです』『聞き取りやすく分かりやすかったです』『講義を工夫してくださるのがわかって嬉しいです』などの回答がみられた。特に、Meetでの、映像と音声によるリアルタイムの講義がわかりやすかったようである。一方、否定的な回答では、『課題が少し難しかった』『課題の説明文を理解するのが少し難しかったです』『答え方が分からずこれで合ってるか分かりません』など、課題の難易度に関する意見がほぼ全てとなっていた。このことから、一部の学生にとっては、Meetでの講義と添付の資料のみで課題を行うのは困難であるということが分かった。



授業に関する質問は7件(5%)、要望は4件(3%)あった。特に要望では、全て『遠隔のプリントが欲しいです』という趣旨の内容のものであり、第6回授業の遠隔授業からは、希望者には事前にMeet講義のパワーポイント資料を配付することにした。

このように、回答へのフィードバックや要望への即時的な対応を心がけた結果、2020年度授業評価では、『授業の計画について』4.81(全体平均4.42)、『授業の内容について』4.53(4.23)、『教員の教え方について』4.65(4.25)、『授業の成果について』4.61(4.31)と、いずれも全科目平均より高い値の評価を得ることができた。

【今後の課題と改善計画】

遠隔授業の試みを通して、Meetを用いた講義は学生の理解度を高める上で効果的であることがわかった。しかし、講義時間が30分を超過することも多々あり、携帯電話で視聴するには、通信料などの学生負担の増加が危惧される。また、学生は講義途中で質問できず、教員側も受講する学生の様子がわからないため、内容への学生の理解度を捉えにくいという課題もあった。その一方で、コメント機能やフォームの機能を使うと、対面では質問するのが苦手な学生でも質問しやすいという利点もあった。このことから、短いMeetの講義後に、講義内容に関する質問時間を設けるといのも改善策の一つと考える。

また、提示した課題では、難しいという反応が多く寄せられた。Meetの講義は、時間が制約されるため、講義で

触れることができなかった内容について、調べ学習を通して学生自身が主体的に学ぶようにと計画を立てたが、対応できない学生も多かったようである。調べ学習に用いる資料は、事前にClassroom上にアップしておいたが、パワーポイント資料と同様、必要な学生には事前に印刷物を配布しておくべきであった。

Classroomのコメント機能を利用した課題では、得られた学生の模範回答を即時的に共有することができ、受講した学生全体の理解を深めることができたと考える。他の科目ではあるが、同様な方法で課題を行った授業では、『フォーム形式ではなく、限定コメントで入力し、その後にクラスコメントでみんなの書き込んだことを教えてくださったので、大変分かりやすかった。』『課題を限定公開コメントで送り、すぐに解説が見られるこの授業形式はとても分かりやすくて良いと思いました。』との回答が得られている。本授業においても同様な受け止めが学生において成されたいたために、授業評価の『教員の教え方について』で高い評価点につながったのではなかろうか。その一方、当初は授業時間中に回答へのフィードバックを行いたいと考えたが、受講生64名全員に対応するのは時間的にも困難であった。多くの個別回答は授業時間終了後に行うしかなく、その点で課題を残した。TAなどの補助があれば改善可能と考えるが、それも困難な現状では打開策が見いだしにくい問題となっている。

【参考文献】

平成13年文部科学省告示第51号：大学設置基準第二十五条第二項の規定に基づく大学が履修させることができる授業等)

令和2年6月5日文部科学省通知(2文科高第238号)：大学等における新型コロナウイルス感染症への対応ガイドラインについて

給食管理の授業における 遠隔授業の取り組みについて

成田 仁美・生活文化学科食物栄養専攻

【科目名】

給食管理

【授業概要】

保健・医療・福祉・学校等の特定給食施設において、栄養士業務として位置づけられている「給食の運営」を行うために必要な食事計画や給食サービス提供に関する基礎知識を修得することをねらいとした科目である。

【科目の到達目標】

- ①給食システムの理論を理解し、検討・評価ができる。
- ②食事摂取基準や情報を理解・整理し、活用することができる。
- ③栄養・食事管理や生産管理の基礎知識を理解できる。
- ④衛生管理等の基礎知識を理解できる。

【実践した内容】

予定していた授業のうち、第1、2、3、4、5、7、9、11、13、14回目に当たる、計10回を遠隔授業で実施した。

遠隔授業は、グーグルクラスルームを通じて、パワーポイントのスライドをPDFにした資料や課題、確認テストを授業の目的やねらいに応じて提示し、学生がノートにまとめた内容や取り組んだ課題を確認して、フィードバックするという方法で行った。

第1回目の授業では、給食の定義、給食の目的、関係法令について学習することをねらいとした。学習の見通しがもてるように、学習の目的、教科書の頁、重要な観点の説明文をまとめてPDFの資料にし、学習した内容をノートにまとめる課題を出した。学習をすすめる上で生じる質問には、コメント機能を通じてリアルタイムで応じられるようにした。フィードバックの方法は、課題の模範解答と、授業の理解度を確認するための小テストを出した。小テストは、誤答に対応した解説を付け、理解を深められるようにした。

衛生管理について学習する第2・3回目の授業では、第1回目と同様に学習のねらいと教科書の頁、重要な観点の説明文を提示するとともに、給食管理実習Ⅰ・Ⅱへの順次性にも配慮し、給食管理実習室内の写真や配置図を示しながら、実際に応じた衛生管理が学べるようにした。また、第1回小テストの平均点や誤答の多い設問などの集計結果を参考にし、用語を確実に理解しているか問う設問を増やし、復習を促すことで、基礎知識の定着を図った。

第4回目の給食の事故・災害対策を学習する授業では、栄養士の果たす役割についての理解が深められるように、実際に起きた大規模食中毒事件のニュースサイトや災害時に栄養士会が配布した食事のリーフレット、学校給食での食物アレルギー対応事例などの資料を見せ、さまざまな状況に応じた対応が栄養士として求められることを示した。と

ところが、授業のまとめとして行った小テストで、1割の学生が授業についてこられていないことが判明した。たくさん資料を提示すると、情報の整理に困難をきたし、理解度が落ちたと判断し、次回の授業は、この結果を参考に改善を図ることとした。

第5回の授業では、学習のねらいと教科書の内容、重要な観点の説明文とともに、グーグルフォームで小問題を出した。そうすることで、学生は問題を解くためにもう一度教科書・資料に戻るという学習スタイルになった。小問題は、全問正解するまで何度でも解けるように設定した。何度も解くことを強制していなかったにもかかわらず、ほとんどの学生が1回以上取り組んでいた。この回の授業のまとめとして行った小テストでは、全員が授業目標の水準に達することができていた。

第6回目以降の授業は、対面授業と遠隔授業を隔週で実施することになった。そこで、対面授業で行う方が効果的だと判断した「給食システムの理論」の理解を図る授業については対面授業で行い、基礎知識の定着を図る授業は遠隔授業で行う方針で、シラバスの授業計画を一部変更した。なお、対面授業においても、小テストを行い、授業の内容を振り返られるようにした。第7、9、11回目の遠隔授業は、第5回目の授業と同様の学習スタイルをとり、小問題を繰り返し取り組むことを通して、基礎的な知識の定着を図った。

第13回目の授業では、この科目で習得すべき技能・表現の到達目標である「食事摂取基準や情報を理解・整理し、活用することができる」をねらいとして、栄養教育媒体の作成を課題にした。第12回目の対面授業において学習した給食の栄養・食事管理の知識を整理・活用し、考案した献立をもとに、喫食者の栄養状態改善の支援、生活習慣病の予防に向けた栄養リーフレットを作成する課題を出し、それをグーグルクラスのドキュメント又は写真形式で提出を求め、添削をするという方法で行った。

第14回目の遠隔授業は、基礎知識の定着を図る授業内容だったため、再び第5、7、9、11と同様に、学習のねらいと教科書の内容、重要な観点の説明文とともに、グーグルフォームで小問題を出し、学習内容の理解を深められるようにした。

【成果と評価】

全学的に実施している授業評価アンケートの【Ⅰ】授業の計画についての結果は、「この授業はシラバスに示された授業内容に基づいて進められた」4.7/5.0、「急な休講や補講、教員の遅刻や早退などは無かった」4.85/5.0、「授業の開始時刻や終了時刻は守られていた」4.85/5.0、平均値は4.8で高い結果となった。【Ⅱ】授業の内容についての結果は、「この授業は興味や関心を持てた」4.41/5.0、「この授業は自分のためになる内容だった」4.48/5.0、「授業の目標がわかりやすく示されていた」4.44/5.0、平均値は4.44でおおむね高い結果となった。【Ⅲ】教員の教え方についての結果は、「教員の言葉は、聞き取りやすかった」4.74/5.0、「学生の理解に合わせて授業が進められていた」4.37/5.0、「教科書、板書、配布資料、視聴覚教材、実演などは、授業内容の理解に役立った」4.67/5.0、「授業に集中できる環境、雰囲気を整っていた」4.78/5.0、「学生の質問に対して適切に対応していた」4.59/5.0、平均値は4.63でおおむね高い結果となった。【Ⅳ】授業の成果についての結果は、「私はこの授業に意欲的に取り組んだ」4.52/5.0、「この授業を通して、新しい知識、技術、能力が身についた」4.59/5.0、平均値は4.56でおおむね高い結果となった。

【今後の課題と改善計画】

今後の課題として、「学生の理解に合わせた授業」になるよう改善する必要がある。たとえば、第4回目の遠隔授業のように提示資料が多いと、情報の整理がしにくく、学生の理解度が落ちたことがあったため、今後は厳選した資料やワークシートを準備することが課題である。

【参考文献】

「給食の運営—栄養管理・経営管理—」 逸見幾世他編著 健帛社

食品学Ⅱ（各論・加工学を含む）の授業における 遠隔授業の取り組みについて

西出充徳・生活文化学科食物栄養専攻

【科目名】

食品学Ⅱ（各論・加工学を含む）

【授業概要】

（食物栄養専攻の授業概要）

食生活が多様化した今日、一口に食品といってもその数は非常にたくさんある。本講義では、植物性食品と動物性食品などを中心に主要食品ごとにまとめ、その特徴、成分、製造方法、用途、嗜好性等について講義する。さらに、県の特産物も取り上げその機能性について解説する。

（生活文化専攻の授業概要）

食生活が多様化した今日、一口に食品といってもその数は非常にたくさんある。本講義では、植物性・動物性食品などを中心に、それぞれ主要食品ごとにまとめ、その特徴、製造や加工方法、用途、嗜好性等について講義する。さらに、県の特産物も取り上げて郷土の食品への理解を促す。

【科目の到達目標】

（食物栄養専攻の授業概要）

- ・食品の成分特性を応用した安全で衛生的な技法などが理解できる。
- ・食品学Ⅰの内容を深め、食品成分の化学変化、現象の理解ができる。
- ・食品の特性や知識を活かし、安全な食品の加工や取扱いが理解できる。
- ・自主的な発言力と発展的な考えを身に付ける。

（生活文化専攻の授業概要）

- ・食品の成分特性を応用した安全で衛生的な技法などが理解できる。
- ・フードコーディネーター3級の資格取得に相応しい食品成分の理解ができる。
- ・食品の特性や知識を活かし、安全な食品の加工や取扱いが理解できる。
- ・自主的な発言力と発展的な考えを身に付ける。

【実践した内容】

本授業は、後期に開催されるため遠隔授業と対面授業が交互に行われた。遠隔授業での対応方法として、Google の Classroom を基本に使用し、学生とのコミュニケーションを取りながら授業を行った。当遠隔授業においては、板書や音声に代わるものとして Microsoft の PowerPoint を使用し、映像と音声を含むデータを mp4 形式としてから Youtube の動画に変換させたものを講義に使用した。画像による遠隔授業においては、Youtube での講義内容を長時間閲覧させることは、学生側に負担をかけることが、文科省の遠隔授業指導要領にあるため、1 動画が、長時間とならないように 1 動画所要時間を約 15 分までとしたものを主に約 4 本立てで構成した。動画と動画の間には、通信障害や授業への取組を積極的に参加できているかということ踏まえ、それらの確認を行う方法として音声での「キーワード」を動画内に設定した。1 動画終了時に各個人との連絡メールに代わるものである classroom の限定公開コメ

ントに指定キーワードを入力させた。また、限定公開コメントへの「キーワード」の記入により、学生個々の授業進捗状況の把握についても同時に行った。その他の取組として、各動画の後に重要事項のまとめと復習を兼ねて三択式の確認問題を三問出題して、回答番号を限定公開コメントに回答させた。全問正解の場合と、二問正解、一問正解の場合に分けて評価し、そのつど返信コメントを変化させながらマンネリ化に注意して授業を進めた。遠隔授業の終了時には、Google Form を利用して三択問題を五問出題して授業の小テスト（まとめ）を行い、成績全体に占める評価点の40点分を配点にした。当授業では期末試験が実施され、評価配点については残り60点として成績を評価した。

なお、この授業は、食物栄養専攻では栄養士資格とフードコーディネーター3級資格、生活文化専攻においてはフードコーディネーター3級資格の必修科目となっている。授業内容は、専攻別と資格目的の違いにより一部内容を変更している。

【成果と評価】

本授業が対面授業と遠隔授業を交互に行った成果については、授業評価アンケート調査結果を基に分析した場合、食物栄養専攻、及び生活文化専攻の両専攻においてアンケート項目の①項目Ⅰ(授業の計画について)、②項目Ⅱ(授業の内容について)、③項目Ⅲ(教員の教え方について)、④項目Ⅳ(授業の成果について)成果は、学生評価をグラフ化して表したレーダーチャートや棒グラフ資料では、何れも専攻平均や全体平均を上回っており一見すると良い結果となっている。しかし、実際のところこの様な評価は、学生の習熟度や卒業前に実施される栄養士実力認定試験結果と比べると④項目Ⅳ(授業の成果について)という面からの評価とは大きく乖離している。同様に食品学Ⅱでは、食品学Ⅰ(総論)で学ぶ食品の成分を十分に理解した上で、次のステップである食品学Ⅱは、様々な食品の主な特徴や性状、機能性と食品の加工といったことについて学ぶ内容であるが、この度の遠隔授業により、授業進捗度が全対面授業時の65%にまで下がってしまったため項目Ⅰ(授業の計画について)を満たしていない状況であった。原因としては、口頭での授業回数が50%、遠隔授業が50%となったことにある。口頭説明では10秒程度の内容が、遠隔授業の場合になるとテキストの説明箇所の表示や重要箇所の提示としなければならぬ事や、さらに対面授業ではスペースの広い板書が活用できていたが、スマートフォン等で閲覧しやすくできる様に設定するためのパワーポイントの1ページの文字制限などを考慮すると、授業の進捗度は授業準備にかかる時間と比べ相反する結果となり、一見すると学生の授業アンケート結果が高評価に見えるものの、教員側からの評価としては、「シラバスの授業計画に対して少ない授業内容であり、伝えられる授業内容も少なかったため苦も無く、映像化された講義を受講できる」という事に学生の本質的な良いとされる評価があったものとする。これらの件だけでも教員側にとっては、これら授業評価アンケート調査結果を成果や評価として判断することは問題視されるのではないかと考える。そもそも授業形態は教員個々で様々であるが、遠隔授業、対面授業の何れにしても教員側は、指導中の学生の表情や仕草、発言などから学生の理解度や授業内容のどの箇所が理解し難いのかを推し量ることができるからである。ただし、もし今回の様な遠隔授業と対面授業の組合せ授業について評価できる場合について考えると、教員の対応する学生数が極端に少数であれば質疑応答はある程度速やかな状態で授業は進められると思われた。

【今後の課題と改善計画】

本学においての上記の遠隔授業取組からいくつかの問題が指摘された。それは、先ずインターネットの環境が未整備なことにある。教員と学生の双方が、映像や音声を通してコミュニケーションを取れない状況では、学生の理解度について熟知できない。また、インターネット環境については学生側のトラブルも少なくは無く、電話での対応などが必要な場合があるため教員側にサブとして電話対応の教職員が必要である。実際に学生のマシントラブルにより100分授業を連続で実施することとなり200分授業となったケースもある。先ずは、新規教務システムの導入よりも遠隔授業の体制整備がより急務であるように考える。

遠隔授業における学修意欲向上のための取り組みについて

野志昌弘・生活文化学科 食物栄養専攻

【科目名】

「食品学Ⅲ」

【授業概要】

様々な加工食品の製造原理・製造工程・保存法・包装技術や加工による食品の成分・物性の変化などについての学修を通じて、食品加工の理論および知識が身につくよう指導するものである。

【科目の到達目標】

- ・食品加工の理論とその利用法について習得し理解を深める
- ・食品を加工および安全に取り扱うために必要な知識を身に付ける
- ・食に関する正確な情報を獲得し、それをわかりやすく表現することができる
- ・食に関する領域を学修した者として相応しい思考および合理的判断が可能である

【実践した内容】

今年度本学における授業形態は、新型コロナウイルス感染防止の観点から隔週での対面および遠隔様式により行われる事となった。このような授業形態における問題点として、以下に述べる事項等が予想された。

- ① 教員および学生両面での遠隔授業に際する通信機器設備の制限から生じる授業に対する反応の不鮮明化
- ② 前項に付随する形で発生する諸問題に対する気づきの遅延ならびに柔軟な対応の困難さ
- ③ 緊張感の希薄さにも起因する授業に対する集中性の欠失
- ④ 他受講生の不可視化（外部刺激の抑制）による学修意欲の保持向上に対する受講生本人の意思力への依存増大

そこで本授業では、前述の予想される問題点等への対策として、次に挙げる内容を実践することとした。

- ① 受講生の授業への対応速度ならびに理解度の確認を目的に、遠隔授業時には各受講生からの返答ならびに回答を求める場面对面授業時より意識的に多く設ける。
- ② 学修意欲の向上を目的に、到達目標をより具体的・実利的かつ近未来的な事象に紐づけて示すことで（例：例年末に実施される栄養士実力認定試験に向けた対策）、授業を受ける事の目的・意義・利点を強調する。
- ③ 予習ならびに復習の意識づけおよび習慣化のため、毎授業の開始時には事前告知のうえで厳格な時間設定での小テストを実施する。
- ④ 授業の質的向上を目指し、遠隔授業では通信機器の使用により時空間的ならびに肉体的精神的な敷居の低下が想起されることから、授業アンケート（各授業に対する意見評価要望取得を含む）を能動的（授業終了時に回答を要求）および受動的（時間や内容を指定しない自由投稿様式）に受け付ける事で拡充する。

【成果と評価】

受講生の学修意欲の保持向上を目的とした本授業における取り組みの成果として、今年度12月に実施された栄養

士実力認定試験の結果について取りあげる。当該試験は、全国の栄養士ならびに管理栄養士養成施設に通う学生および卒業生を対象に、栄養士の資質向上と質の均一化を目的の一部として実施されるものである。同試験は14科目および総合力問題から構成され、本授業が主に与する科目は「食品学各論」である。今年度は、本授業受講生全員が同試験を受験したが、その「食品学各論」科目における獲得点数は、受講生全員の平均点では全受験生でのそれを1割以上上回っていた。さらに、受講生個人での獲得点数で見ても受講生全員のそれが全受験生中の短期大学生の当該科目獲得平均点を上回る結果となった。以上の結果は、本授業による一定以上の学修成果を質的に示すものである。また、同試験後に行った振り返り学習では、全受講生で試験本番時よりも理解の増進が見られたことから、各受講生は意識的に復習等を行っているものと思われる。よって、到達目標の実利的な明確化は、数字に表れる形で学習意欲の増大に効果的であったのではないかと考えられる。

次に本授業に対する取り組みに関する評価として、本学にて各科目を対象に実施された授業評価アンケート結果の一部について触れる。本授業は、同アンケートにおける本学食物栄養専攻での科目平均評価と比較して「この授業は興味や関心が持てた」「この授業は自分のためになる内容だった」「この授業を通して、新しい知識、技術、能力が身についた」の項目で特に高評価を得ていた。この結果は、明確な達成目標を示し、それに対する自身の取り組みが小テストや期末試験に留まらず、全国区を対象とした試験の結果に数字で表れた成果から得られた達成感や自信などが反映されたものであると考えられる。また、「学生の理解に合わせて授業が進められていた」の項目についても良好な評価であったが、これは、受講生各人との意見交流により各自の不足部を補えたことや、そこで発覚した理解不足が想起されるポイントを次回授業冒頭部において小規模な反復学習の様式で受講生全員にて共有したこと由来すると考えられる。さらに、「授業の目標が分かりやすく示されていた」「私はこの授業に意欲的に取り組んだ」の項目でも平均以上の評価が得られており、これは本授業に対する実践内容が一定以上の成果を達成したことを示している。

【今後の課題と改善計画】

前述の授業評価アンケートにおいて、本授業が他と比較して低評価であった項目に「学生の質問に対して適切に対応していた」が挙げられる。この原因には、受講生からの意見要望を時空間および質的に広範囲で聞き取ったため、実現困難あるいは時間的に担当者単独では迅速な対応が不可能なケースが要望に含まれた事などが予想される。柔軟性は損なわれるが、質問要望に対する返答対応には日時や期限を予め明白に設定しておくことが策として考えられる。すなわち、今後の課題ならびに改善には授業外時間の有効活用が鍵になる可能性がうかがわれた。

著者の前期担当科目に「食品学Ⅰ」があった（本講義は後期開講）。当該講義は遠隔様式が中心の授業であり、要所となる授業回にて大規模な予習復習に相当する取り組み課題を提示することで授業外時間における学修を支援する取り組みを試みた。しかしながら、受講生の多くは自発的に同課題に取り組む事は無く、再試験等に該当した際においても明確な指示を無くして同課題の学修への活用は見られなかった。これはすなわち、学修不足が示される者ほど“遠回り”や“無駄”を嫌い“最短距離”での勉強を求める傾向にある事を示していると捉えられる。

実践内容の項目で触れたように遠隔授業では、その性質的な差異に由来する受講生の授業に対する取り組み・姿勢の不鮮明化により、受講生各自の“わからない”“できない”がどの程度の基盤・取り組みの上に各々成り立つものであるか対面授業時と比べて推し辛い状況にある。また、自発的な学修の支援における“適切な対応”は、指導者からの目線と受講生のそれとは異なるものであり、受講生目線の“適切な対応”に答えることが必ずしも正義であるとは断言できないと著者は捉えている。例えば、内容が難しすぎるという意見に授業の到達点を下げ続けることは安易かつ不利益ではなからうか。“勉強”という言葉の意味と向き合った上で、自らの真摯な努力や経験より成果を獲得する体験こそが遠隔様式での授業受講に際して重要となる“学修力”の基盤形成に肝要ではないかと結論付ける。

栄養士実力認定試験対策の授業における 学習意欲向上のための取り組みについて

堀江大輔・生活文化学科食物栄養専攻

【科目名】

キャリアデザイン

【授業概要】

栄養士を題材とし、学外で実施される実習へ向けて栄養士の現場を知り、円滑に業務を遂行するために必要な社会通念やコミュニケーションスキルを培う。また、栄養士実力認定試験の準備や、栄養士の資質向上のための授業を通し、生涯学習力を培う総合的な授業を行う。

【科目の到達目標】

自ら進んで知識技術の獲得に積極的に取り組むことができる。他者の考えを理解し、自己の考えを明確にして意見交換できる。遅刻や欠席をせず、計画的、意欲的に目標達成に取り組むことができる。求められていることを把握し、その実現に努力できる。

【実践した内容】

生活文化学科食物栄養専攻2年生を対象とした授業である「キャリアデザイン」は、前期において「給食管理実習Ⅲ（校外実習）」へ向けた事前学習を、後期において一般社団法人全国栄養士養成施設協会主催の栄養士実力認定試験に向けた対策を行う、オムニバス形式の授業である。このうち、著者は後期の試験対策1回分(50分)を担当した。ここで行った授業について以下に記載する。

まず授業への準備として、対象となる栄養士実力認定試験について、過去の問題などを基に学生へ伝えるべき内容を検討した。栄養士実力認定試験は、14の科目と総合力問題を合わせた計85問の問題から構成され、内容は栄養士実力認定試験出題基準（ガイドライン）に沿ったものとなっている。この授業で著者が担当した分野は「臨床栄養学概論」であった。ガイドラインの改定は2019年6月になされているが、それに沿った2019年度の臨床栄養学概論分野の問題は、これまでと比べ、出題される問題に変化が伺えた。よって、授業においてはまず、その点を学生に伝え、近年の傾向を知ることで試験への意識を向上させるように配慮するようにした。また、本授業では傷病者と比較し自身を例にイメージしやすい健康者の話題にまず触れ、健康者と傷病者を比較することで、栄養目標量の数値などを覚えやすくする工夫をすることとした。次に、授業で扱う範囲を選定した。50分という限られた時間でできる内容とするために、近年10年分の問題を確認し、授業で取り扱う範囲出題頻度を基に9個の内容について、印刷した過去の問題に取り組ませることとした。

実際の授業では、これらの問題について取り組む時間を少しとったのちにパワーポイントを用いた各問題の解説を行った。この解説の際には、まず問題を表示し、学生に質問することで学生の意識を問題に向けながら、正答と解説を示す形とした。これによって学生が時間内に問題への意識を集中できるよう配慮した。

【成果と評価】

今回の取り組みが学生の意欲向上へ直結したかを客観的に評価できる指標はない。しかしながら、昨年度も同様の授業を担当し、その際に考えられた課題についてはある程度改善できたと考えられたので、以下にその点について記す。昨年度の課題としてはまず、問題を解くための時間が足りないという点が挙げられた。これについては、各項目について問題数を2問程度出題していたところを1問へ減らし、全体の問題数を減らすことと授業開始時に問題を解く時間を取ることで対応した。実際には全員が確実に解くのを確認してから解説を行うだけの時間はなかったが、ある程度問題を確認した上で解説を聞くことができたと思われた。よって、初めに印刷物で問題を示す方法が時間の限られた中で説明するためには有効であると考えられた。また、昨年度のもう一つの課題として、講義時間内で対策する範囲を広げることがあった。これについては授業内で説明する内容が4個に限られていたものを、9個に増やすことで、相対的に幅広い問題に対応できるよう改善できたと考えられた。栄養士実力認定試験の試験範囲を全て網羅できているわけではないが、50分という時間を考えると妥当な配分であると思われた。

以上より、客観的指標には欠けるが、出題数を調整することで授業内時間配分を調整し、昨年度実施時の課題については、改善できたと考えられた。しかしながら、客観的指標に欠けた評価しかできないことといった課題も残った。また、学生の理解度を確認する方法も、授業内で学生の反応を見ることに限られていたので、その方法を確立する必要もあると考えられた。

【今後の課題と改善計画】

今回の取り組みにおける課題は、まず取り組みを評価する指標や学生の理解度を確認する手段を準備していなかったことがある。特に時間の限られた中で、できる限り多くの内容を伝えようとしたため、学生の反応を確認しきれずにいた部分もあったので、今後は学生の理解度を確認するために、授業理解度を尋ねるアンケートあるいは疑問事項・感想等を記入できる用紙を用いて、学生の理解しづらい内容について対応したい。特にこうした用紙は、授業に対する学生と教員の考えのギャップを、教員が理解するために有効なツールであると思われるので、積極的に利用して、疑問や感想を基に、授業後の補足プリントを準備することなどへ役立てていきたい。

ところで、本年度はコロナウィルス感染症の流行により、対面授業の一部が遠隔授業へと代替する必要があり、遠隔授業システムが導入された。本授業で著者は使用しなかったシステムであるが、導入によって授業前の予習あるいは復習に役立つものをデータ配信することが可能となった。こうした状況で、昨年12月に行われた本学のFD研修会が、「遠隔授業の振り返りと分かち合い」という内容で行われた。研修会の中では、遠隔授業導入によって、課題提出や意見発表がスムーズとなる部分もあったという声があった。学生にとっては、システムの導入により学習方法の幅が広がったと考えられる。先ほどのアンケートにより得られた情報から補足が必要と思われた項目については、こうしたシステムを利用して復習用の資料あるいは問題などのツールを配信して、学生をサポートする方法を検討していきたい。特にこうしたツールを利用した学習方法は、従来の教科書や紙の資料のみでのアナログな学習方法を苦手とする学生からも取り組みやすい可能性があり、少しでも多くの学生に意識を向上させる手段として活用することを、今後、模索していきたい。

【参考文献】

- ・ SYLLABUS 2019年度 講義概要 2年用、和歌山信愛女子短期大学
- ・ 栄養士実力認定試験出題基準（ガイドライン）、2019年6月改定、一般社団法人全国栄養士養成施設協会 栄養士実力認定試験出題基準検討委員会

栄養教育論 I（基礎知識）の授業における、 遠隔授業の取り組みについて

森岡 美帆・生活文化学科食物栄養専攻

【科目名】

栄養教育論 I（基礎知識）

【授業概要】

現在、日本の食生活は、過剰栄養による肥満と若年女子、高齢者にみられる低栄養という二極化の状況にあり、食生活を見直すために適切な栄養教育が求められている。栄養教育の基本である栄養管理プロセスに従い、栄養教育に必要な基礎知識と技術を説明する。

【科目の到達目標】

- ・栄養教育を行なうために必要な基礎知識と技術を説明できる。
- ・授業に積極的に取り組み、自主的に予習・復習ができる。
- ・日本人の食事摂取基準¹⁾に示されている数値について説明できる。
- ・食生活指針²⁾に基づいて食生活を見直すことができる。

【実践した内容】

食生活を見直すために求められている栄養教育に必要な基礎知識と技術について、グーグルクラスルームを用いて遠隔授業（表1.）を実施した。質問の回答、指定したキーワードを各自の限定公開コメントに入力してもらい、進捗状況を細やかに確認しながら進めた。

スモールステップで、知識を修得してもらうため、フォームを用いて、授業の最初に前回の授業の確認テストを行った。採点機能を用いて、迅速なフィードバックを実施した（図1.）。

最新の情報を収集するトレーニングとして、農林水産省、厚生労働省の Web ページの URL をアップして、実際に Web ページを確認してもらった（図1.）。特に、日本人の食事摂取基準は、5年毎に改定されるので、沿革、改定のポイントを詳しく説明し、改定された際の対応を理解してもらった。

食生活指針（文部科学省、厚生労働省、農林水産省策定）、ブレスローの7つの健康習慣、セルフエスティームの測定、食事バランスガイド等の理解を深めるため、フォームを用いて自分自身の状態を確認してもらった（図1）。栄養士として求められる基本的な資質・能力として、「人々の生活背景や価値観を尊重し、豊かな人間性を持って、より良い食生活の意思決定を支援できる」³⁾ということが求められており、授業において、まず、自分自身を知ることによって重点をおいた。

栄養素レベルでの食事を確認する際に重要な日本食品標準成分表（文部科学省）の理解を深めるために18食品群のインデックスを作成して各自の日本食品標準成分表の項目に貼付し、撮影してファイル形式で提出してもらい作業の確認を行った。

栄養士法、管理栄養士・栄養士倫理綱領を詳しく解説した。管理栄養士・栄養士倫理綱領は、すべての人びとの「自

己実現をめざし、健やかによりよく生きる」とのニーズに応え、管理栄養士・栄養士が、「栄養の指導」を実践する専門職としての使命と責務を自覚し、その職能の発揮に努めることを社会に対して明示するものである²⁾。入学してすぐの段階で、取得を目指している栄養士免許に対して目標をもって学修していくという意識付けを行った。また、2年次に実施される栄養士実力認定試験、卒業後3年の実務経験を経て受験可能となる管理栄養士国家試験で各項目がどのように出題されるのかを解説した。

表1. 授業のテーマ及び内容

1	自分の食生活を点検してみよう	8	健康増進、生活習慣病予防
2	栄養教育の概念、栄養教育の目的	9	日本人の食事摂取基準の概要
3	栄養教育の概念、栄養教育の目標	10	日本人の食事摂取基準の活用
4	栄養士法、栄養士の職業倫理	11	食生活指針の概要
5	栄養教育の対象、食環境と栄養教育	12	食生活指針の活用
6	栄養教育・栄養改善の変遷	13	食事バランスガイドの概要と活用
7	栄養教育の現状と展望	14	日本食品標準成分表の概要と活用



図1. Google Classroomでの授業例

【成果と評価】

授業評価によって得られた結果を下記に示す。科目平均は、いずれの項目においても学科平均、全体平均より高い値であった。この授業で実践したことは、概ね良い評価を得ることができた。評価の高かった項目を見ていくと、授業の内容では、授業の目標が分かりやすく示されていた4.68、教員の教え方では、授業に集中できる環境、雰囲気を整っていた4.61、学生の質問に対して適切に対応していた4.61 授業の成果では、この授業を通して、新しい知識、技術、能力が身についた4.57であった。科目の到達目標を概ね達成できていると考える。

	科目平均	学科平均	全体平均
I. 授業の計画について	4.74	4.48	4.52
II. 授業の内容について	4.54	4.25	4.37
III. 教員の教え方について	4.43	4.30	4.37
IV. 授業の成果について	4.55	4.37	4.44

受講による学生の気づきについて（一部抜粋）

- ・小学校や中学校で学んでいた食事バランスガイドにこんな深いものがあつたのは知らなかつたので学べてよかつた。今自分がいかにバランス良く食事ができていないことにも気づくことができ、自分のことだけでなく日本人が不足している栄養など、講義を受ける度に新たに栄養による知識を得ることができてよかつた。
- ・これから先、栄養士・管理栄養士として働いていくにあたり、指導者という立場になるということで、この講義では「栄養教育」について重点的に学ぶことができた。またその中で、自分の食生活について気づかされる部分というのめたくさんあり、改めて食生活などを見直すいい機会にもなつた。
- ・栄養士として、栄養・食を通じて、人々の健康と幸福に貢献するためには、まず自分自身の食生活を見直していくことが大切であり、見直すためには、授業で学んだ食事摂取基準や食事バランスガイドをしっかりと活用していくことが必要だと思つた。
- ・栄養教育論で栄養士・管理栄養士になるためには健康増進法や栄養士法などのさまざまな法律に基づき、免許や資格を取れることを学べた。授業の速さは速すぎず、じっくり学ぶことが出来てよかつたと思つた。

【今後の課題と改善計画】

今年度は、14回すべてが遠隔授業となつたが、限定公開コメントを用いたことと、フォームによる確認テストを実施したことで、学生の状態を速やかに正確に把握することができ、授業をスムーズに実施することができた。対面授業に戻つた際に、遠隔授業で用いたフォームによる確認テスト等の機能を活用して各学生の理解度を正確に把握しながら進めていきたいと考える。栄養士として必要な知識・技能を確認する栄養士実力認定試験が2年後期に実施されるので、スモールステップを踏みながら着実に基礎知識を修得するように確認テストの実施を継続していく。

【参考文献】

- 1) 厚生労働省「日本人の食事摂取基準(2020年版)」
https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/kenkou_iryou/kenkou/eiyou/syokuji_kijyun.html (2021年2月25日)
- 2) 文部科学省、厚生労働省、農林水産省「食生活指針について」
<https://www.maff.go.jp/j/syokuiku/shishinn.html> (2021年2月25日)
- 3) 特定非営利活動法人日本栄養改善学会 平成30年度管理栄養士専門分野別人材育成事業「教育養成領域での人材育成」栄養士養成のための栄養学教育モデル・コア・カリキュラム
<http://jsnd.jp/core01.html> (2021年2月25日)
- 4) 公益社団法人日本栄養士会 管理栄養士・栄養士倫理綱領
<https://www.dietitian.or.jp/career/guidelines/> (2021年2月25日)